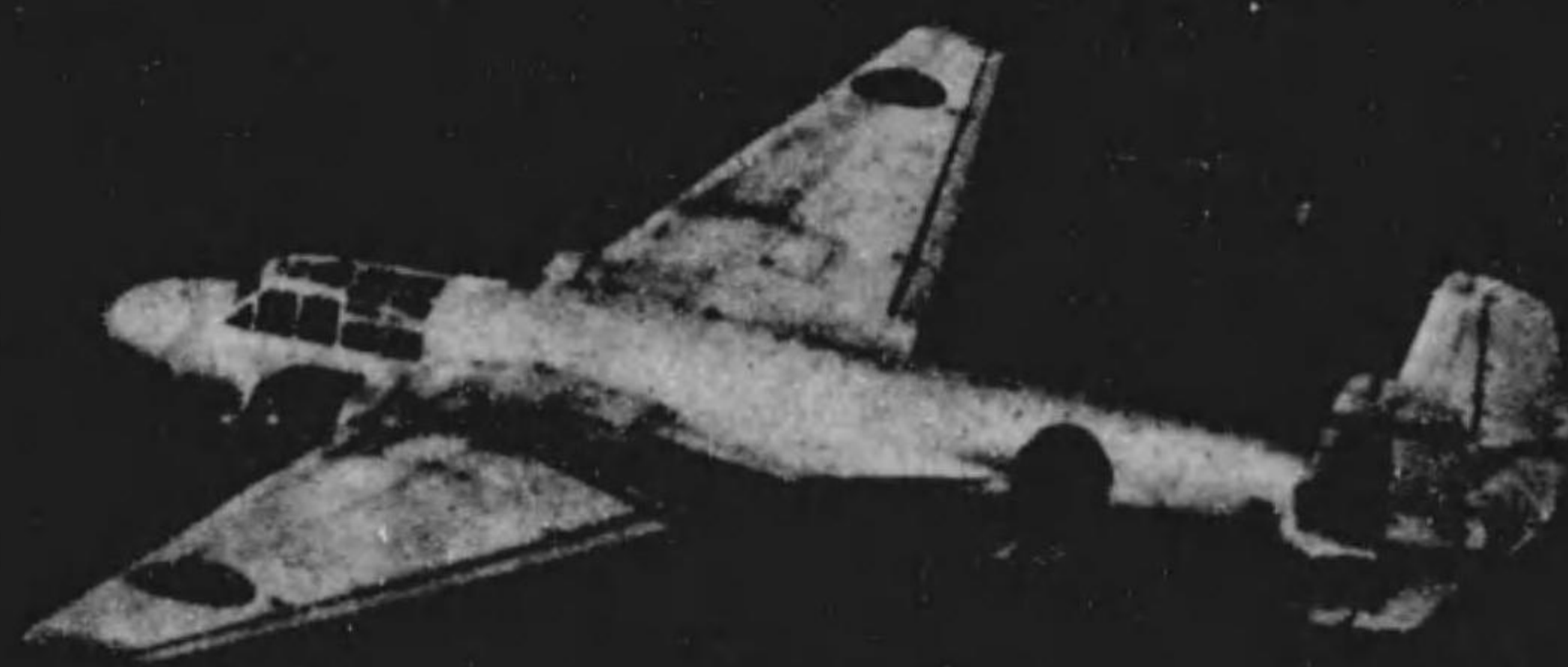


驚荒の海

特243

512

海軍省海軍事務普及部校閲済



1



0057558000

0057558-000

特243-512

海の荒驚

鉄木真・著

愛国婦人会

昭和13

AJG

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

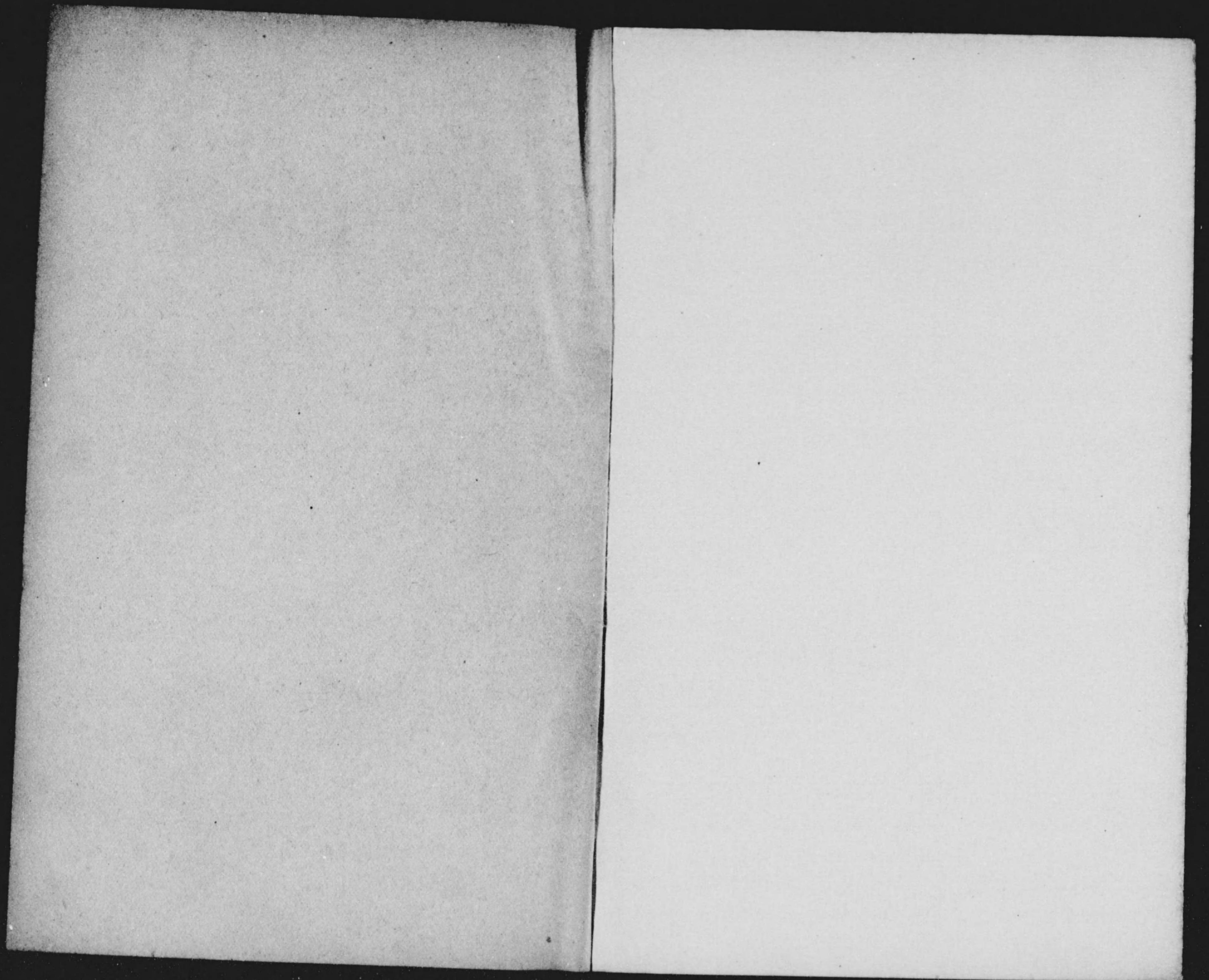
200

特 243
512

海軍省海軍省事務普及部校閱濟

鷺荒の海

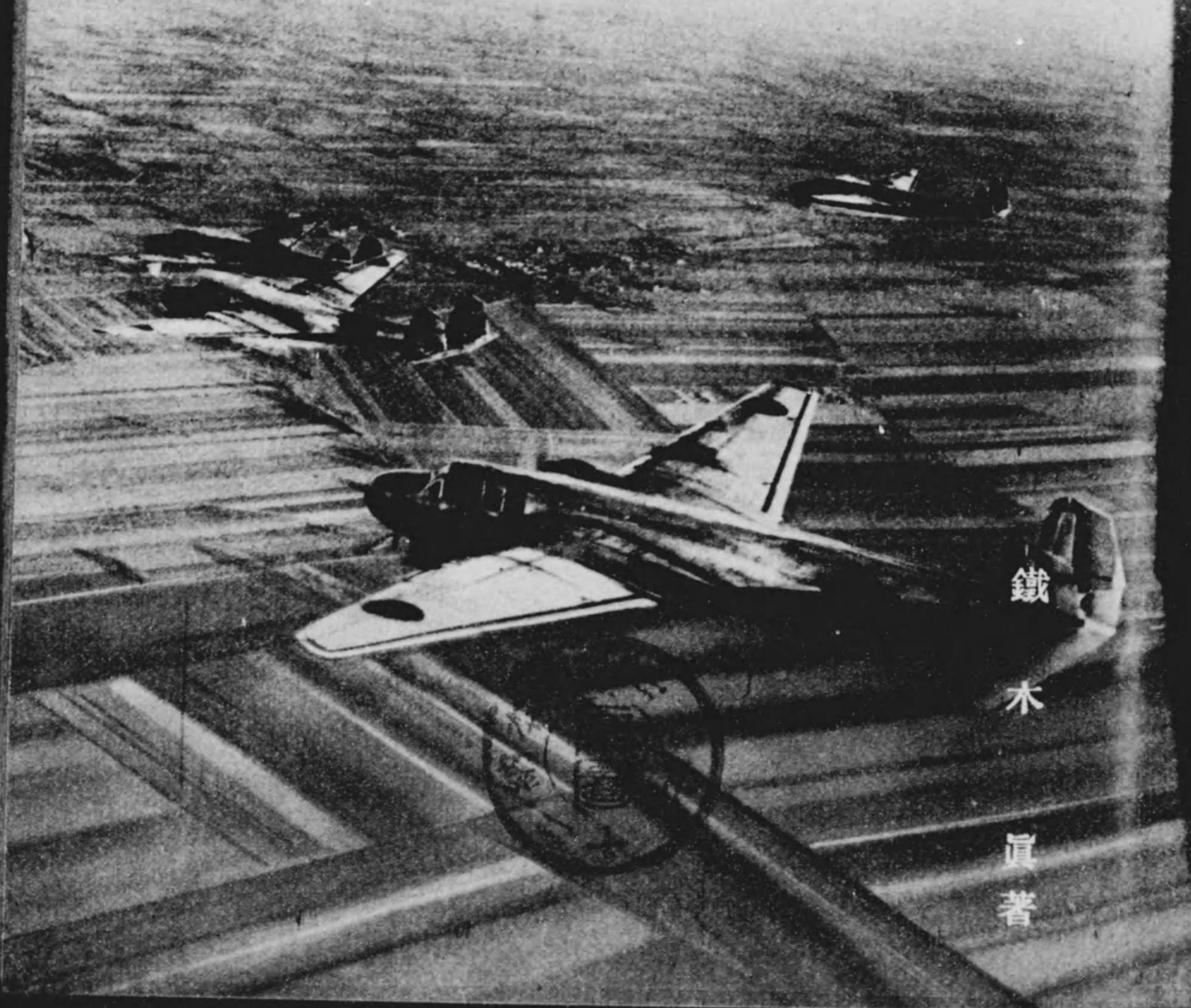




背243
512



海
の
荒
鷺



鐵

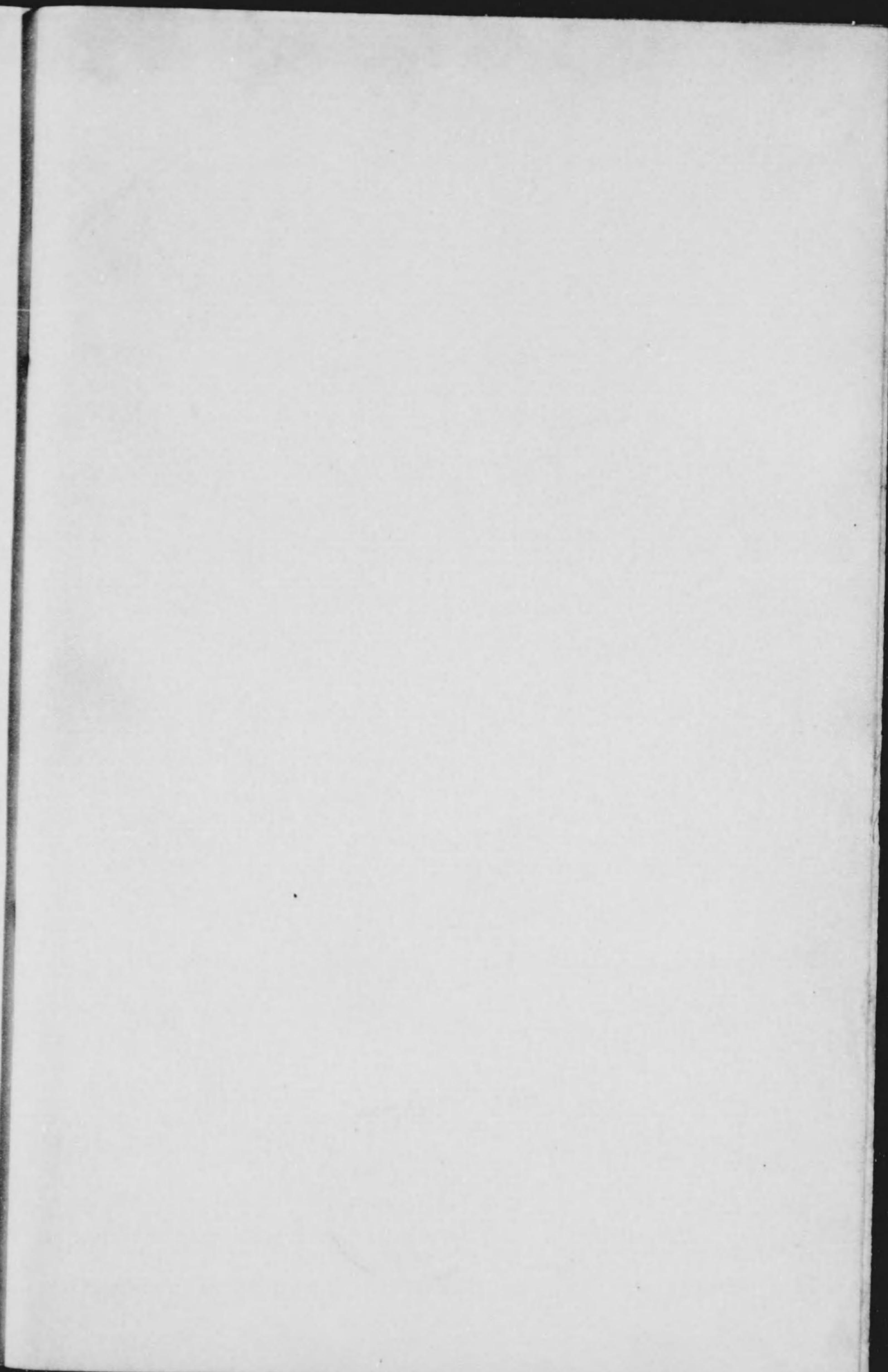
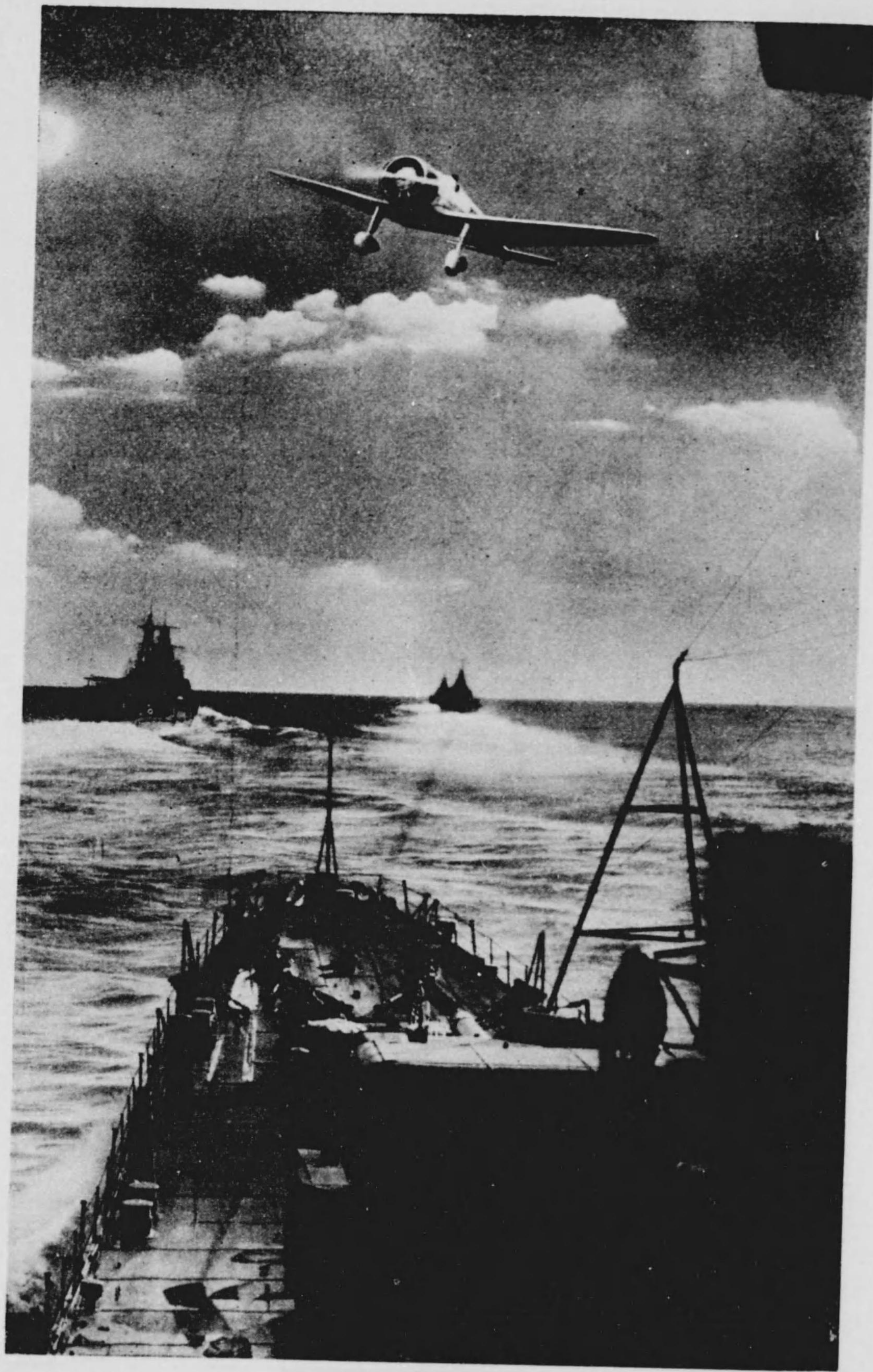
木

眞

著



海軍大臣米内光政閣下御題



發刊に際して

今回の支那事變に於ける我が海軍航空隊の比類なき活躍は、世界空中戦史を飾るもので、各國はその盡忠報國の一念と、勇猛果敢の働きにたゞ驚歎の眼をみはるばかりである、殊に中南支の抗日根據地の空爆と、南京、南昌、漢口の上空で行はれた壯烈無比の空中戦は、國民等しく感激、感謝、絶讃の言葉を送つて止まない。

思へば昭和十二年八月十四日、荒れ狂ふ大暴風雨を冒して長翔、抗州及び廣徳飛行場を爆撃してから海の荒鷲の活躍は初つた。かくて戦史を飾る數々の武勳は、今燦としてこゝに輝く。吾れ等は擧げて海の荒鷲の武勳を讃へ謝し。

護國の華と散つた「海の荒鷲」の勇士に對し謹んで崇敬なる至情を捧ぐ。

かく聖戦に輝く武勳の海軍航空隊の認識を新たにせん事をねがひ「海の荒鷲」の一書を世に送る今回の發刊に際し海軍軍事普及部及び松島中佐、石淵主計少佐他先輩諸氏の多大な御聲援を謝す。

昭和十三年夏

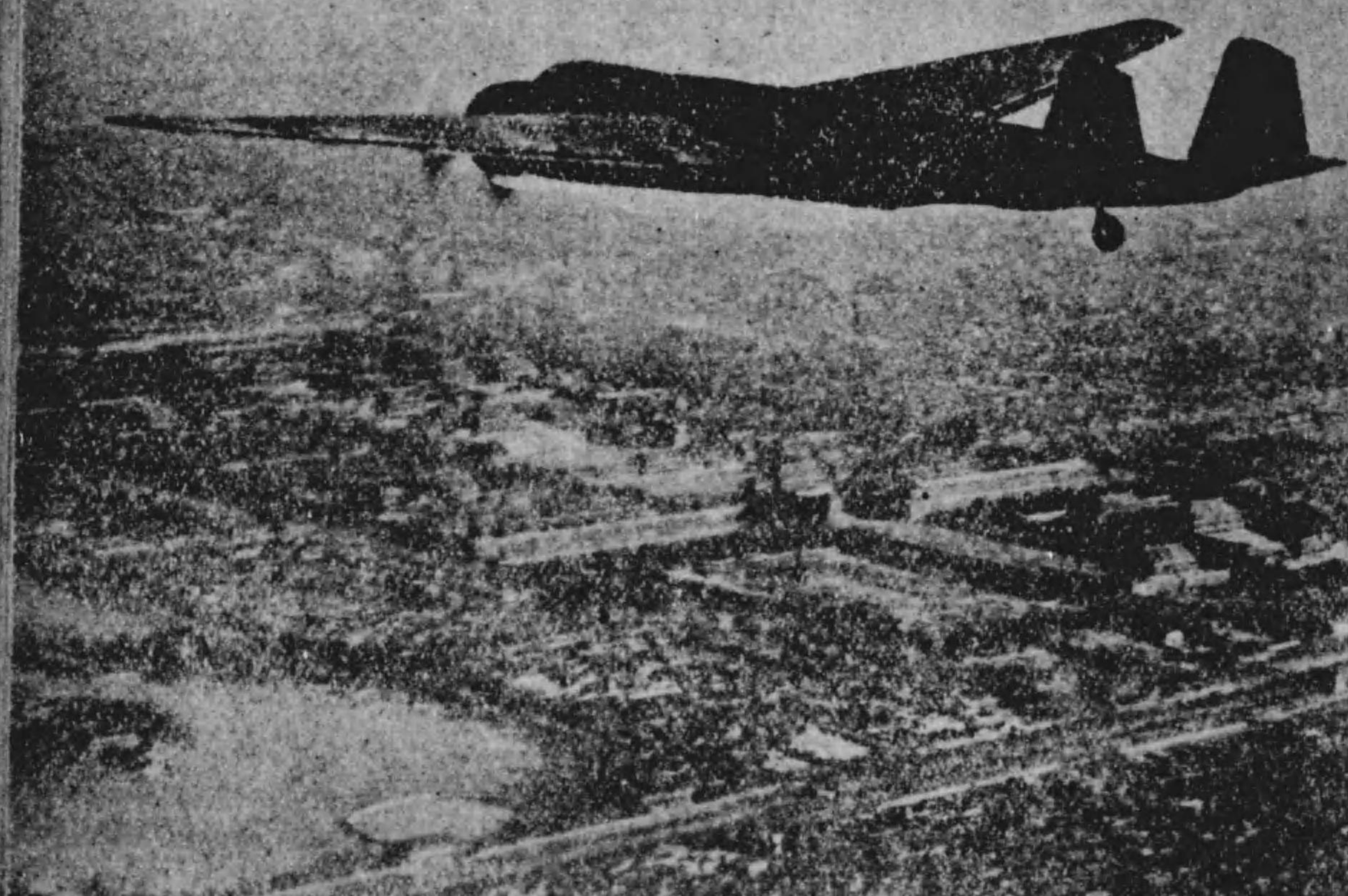
著者

海の荒鷲

海の荒鷲 目次

口 緒	海の荒鷲爆撃隊——洋上の戦闘機	一
發刊について	……	四
本文……口繪……	……	五
航空機の發明と目的	……	六
我が海軍航空隊發達史	……	二二
海軍機の種類とその任務	……	二三
我が海軍航空隊の現勢力	……	三五
プロペラ廻轉の間から發射の機關銃の彈丸	……	三八
航空母艦の話	……	四三
空中戦と空爆の話	……	五四
科學餘話——飛行機の恩人は牛、その妹はピアノである	……	六二
グライダー物語	……	七〇
海軍へ献納の報告號について……海軍省經理局々員海軍主計少佐石淵知定	……	七八
報國號飛行機一覽表	……	八〇
少年航空兵志願の葉	……	九二

目次



航空機の發明と目的

飛行機は何の爲めに生れたか

仰ぎ見る大空、無限の沈黙を續けながらも嚴として勇大なその姿。その自然を征服し、自由に翔けめぐる航空機。

航空機は一體何の爲めに發明されたか――。

おゝ空を飛ぶ人類最高の慾望が達せられてから三十六年、人智の寶庫は開かれて科學の力は遂に自然を征服し、發明當時或は十年、二十年の發達途上に比べて、その躍進振りはたゞ驚嘆に價する。

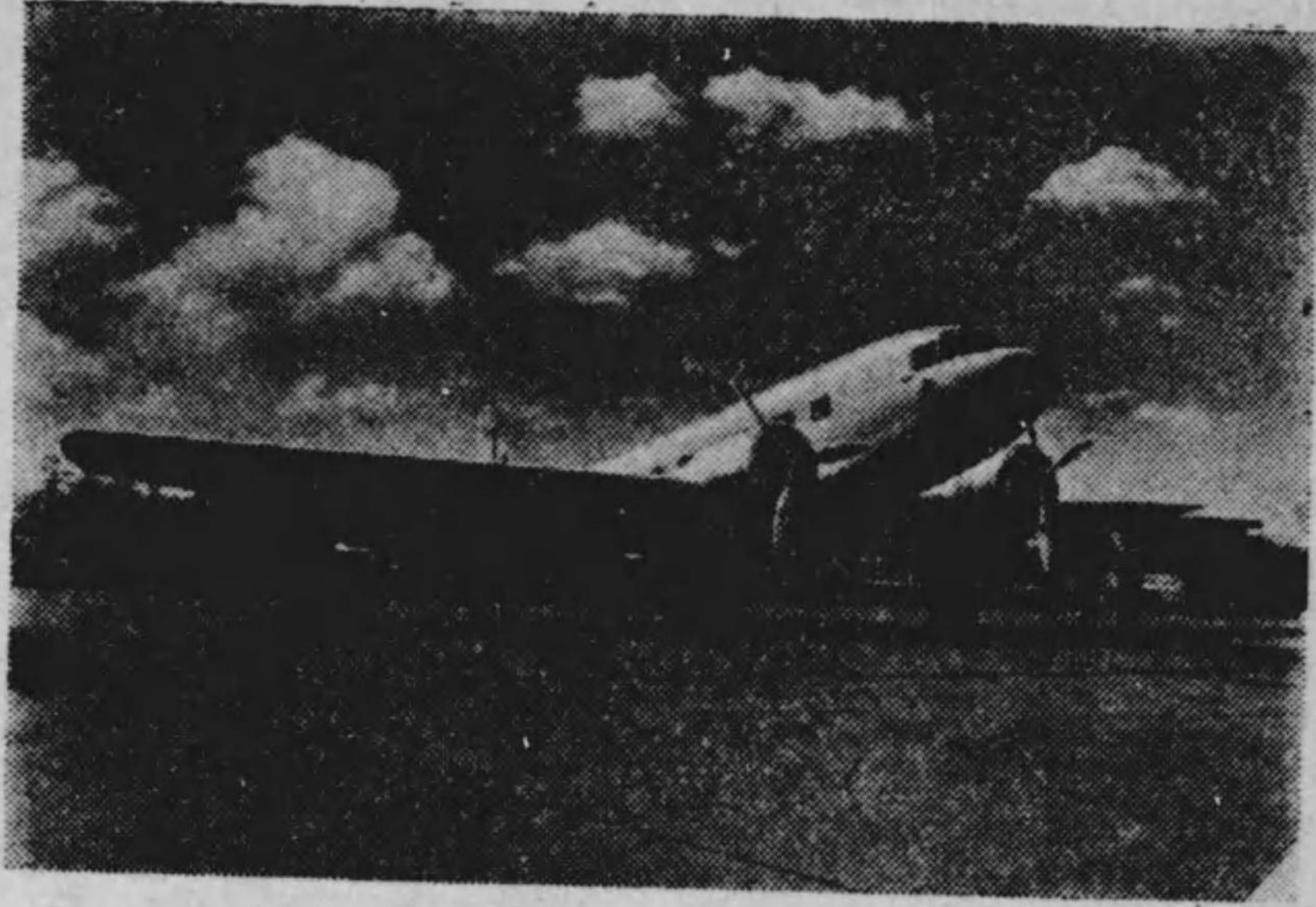
米國人オーヴィル・ライト及びウイイルバー・ライト兄弟が初めて發動機を付けた空飛ぶ機械。今の航空機で空を飛んだのは明治三十六年―西曆一九〇三年十二月十七日の事である。

その歴史的飛行の科學機は、十六馬力のエンジンに裝備した複葉機で、米國カリフォルニアの野原か

ら這り出し、二百六十米の距離を五十九秒飛行したのである。

かくて科學は自然を征服、人智の及ぶ限り、その能力の續く限り、多大の犠牲と、より絶大な苦心が續けられて近代科學を誇る航空時代は遂に來たのである。

科學の粹を集めた航空機、軍用にあつては祖國の空を護り、出でゝは空爆行に、華々しい空中戦を演じ、商業上にあつては空から空へと飛んで世界を一周し、記録飛行としては、地球は七日に收縮され、成層圏の夢も破れ、小銃彈を追越す超スピード、魔の太平洋も既に屈服、太平洋は最早溝板を起す程にしか考へられない、



(輪空本日) 號士富スラグダ機客旅型大

高度に更に滞空に、長距離に、世界航空界の現状は三十有餘年の苦心の結晶である。然も各國は尙物足らぬとして、人智の極を求めて止まない。

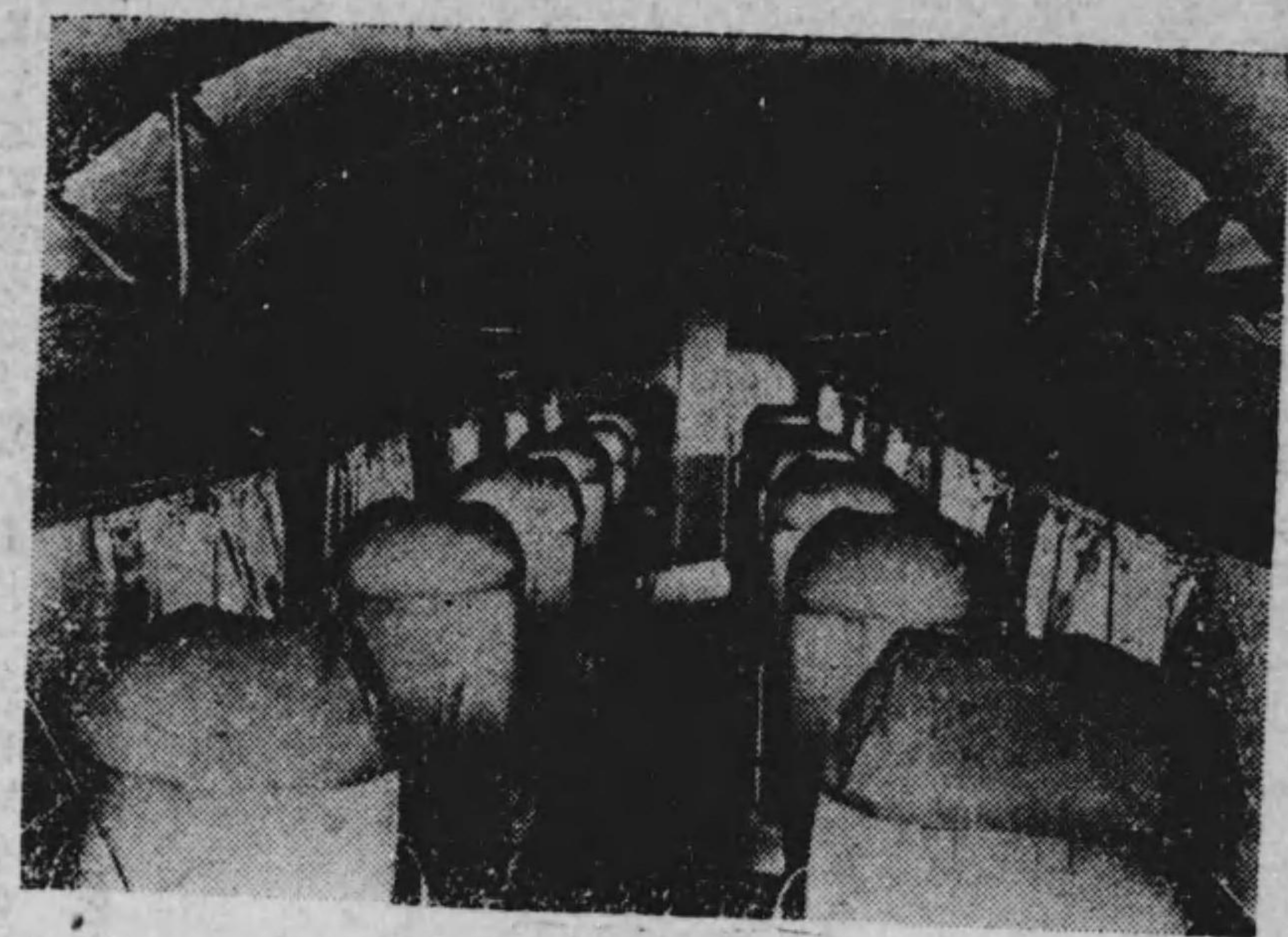
かくの如く驚異的發達を遂げた航空機は一體何の爲めに生れたのであらうか。何をすする爲めに發明されたものであらうか、諸君はこれに對して明答が出来ますか。

航空機は競争をする爲めに發明されたものだらうか、否。ではお客を輸送する爲めに生れたものだらうか、否。貨物を運搬する爲めか、ノウ。

空を飛ぶ爲めか、空の遊覧の爲めか、勿論空を飛ぶのではあるが、これは明答ではない。では一體、飛行機は何んの爲めに發明され、この世の中に生れて來たのだらうか。

諸君なんと、それは郵便物を運搬する爲めにこの世に生れて來たのである、といつたら或ひは信じないものもあるかも知れない、然しそれは事實であつて、これが明答であるから妙である。

つまり航空機は異狀發達を遂げたのと、歐洲大戰に使はれたので、最初の目的を忘れられてしまふ様な結果を生んだものである。



大型旅客機客室内部

つまり人と人との交通が繁くなり、郵便による貿易、親交等がなされてゐた時代に、一刻も早く人の手から手へ渡されたら、親交の密度も加はり、貿易の發展をも期する事が出来るではないか。

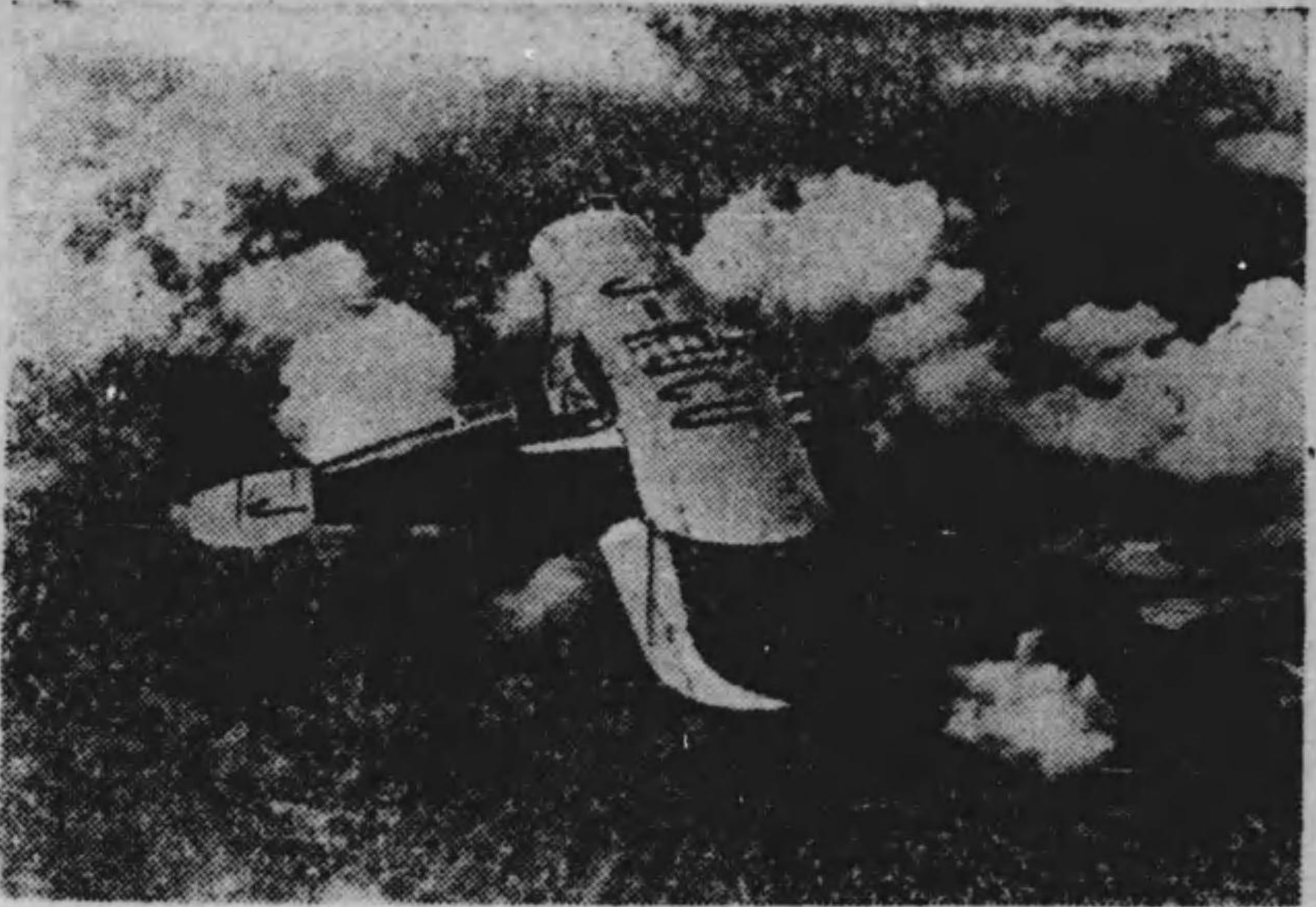
然らば如何にして、その郵便物を急速に運ぶならばよいか——と散々に考へた後に空を飛んで行つたならばどうだらうか、といふ事に氣付いて航空機と名付ける「空を飛ぶ機械」が發明されたのである、ところがその發達途上歐洲大戰にあつたのである。

そして航空機が大戰に参加したばかりに異狀な躍進を遂げるに至つたのである。

もしこの發明が大戦に利用されないものであつたならば、又大戦に利用されても効果の薄いものであつたならば、この様に異常な躍進をする事は出来なかつたかも知れない。航空機を戦争に使つてみると、その威力、その効果は想像以上、驚くべき効果を挙げたのである。

こゝに於て各國は大戦中にもかゝはらず、非常な犠牲を忍び、數えきれぬ巨費を投じ、無限の勞力を費して、航空機の發達助長に努めたのである。かくして航空機は大戦終了後に於て各國の所有臺數は何んと少ない國で十一倍の多きに達してゐた。これをみても此の大戦中に於ける苦心と、躍進、發達の跡が知れる。

それから年と共に、航空科學に對する各國の研究は進み、現在では歐洲大戦當時に、その威力を誇り、或は縦横無盡に活躍して空襲に、爆撃に歐洲の天地を震撼させた爆撃機も、戦闘機も、今日では物の數ではない、貧弱な民間飛行學校ですら、こうした種類のものは使はない位である。まして人智の最高を誇ると思はれる、現在の航空機から見れば、發明當時の目的が途中から變つた様に思はれるのは當然の事である。



快翔する郵便便機

話が一足飛びしたが、航空郵便の爲めに發明されたものが、歐洲大戦によつて、實に想像以上に急速發達を遂げ、然も戦争に効果があつたので、郵便の爲めに發明されたといふ事を忘れられてまつたのであるが、大戦が終つて實戦に参加の勇士も、各國の航空關係者も初めて氣付いた様に、飛行機は一體何の爲めに發明されたものだらうか、と考へるに至つた。

戦争に使つては効果があつたが、戦争が終つてみると戦争にはかりに使ふものでない……と考へて、あゝさうだ「航空郵便」の爲めに發明されたのだつたと、商業飛行に着眼したのであつた。

かくてまづ歐洲各國が競ふて初めた。

現在世界で最もよく發達し、最もいゝ設備を以つて

世界一を誇る米國は、今から二十年前に世界各國の長所を、すつかり取入れて準備をしてから開始したので完備してゐる。

かくて世界各國には現在、くもの巢の如くに航空路がひかれるに至つたのである。そして世界一周をする旅人も、今は汽車や、汽船に乗らずとも、空から空を飛んで一巡する事が出来る。思へば三十餘年の發達としては、その進歩、躍進に驚嘆せずにはゐられない。右の如くで航空機は何んの爲めに發明されたかと判つた事と思ふ。

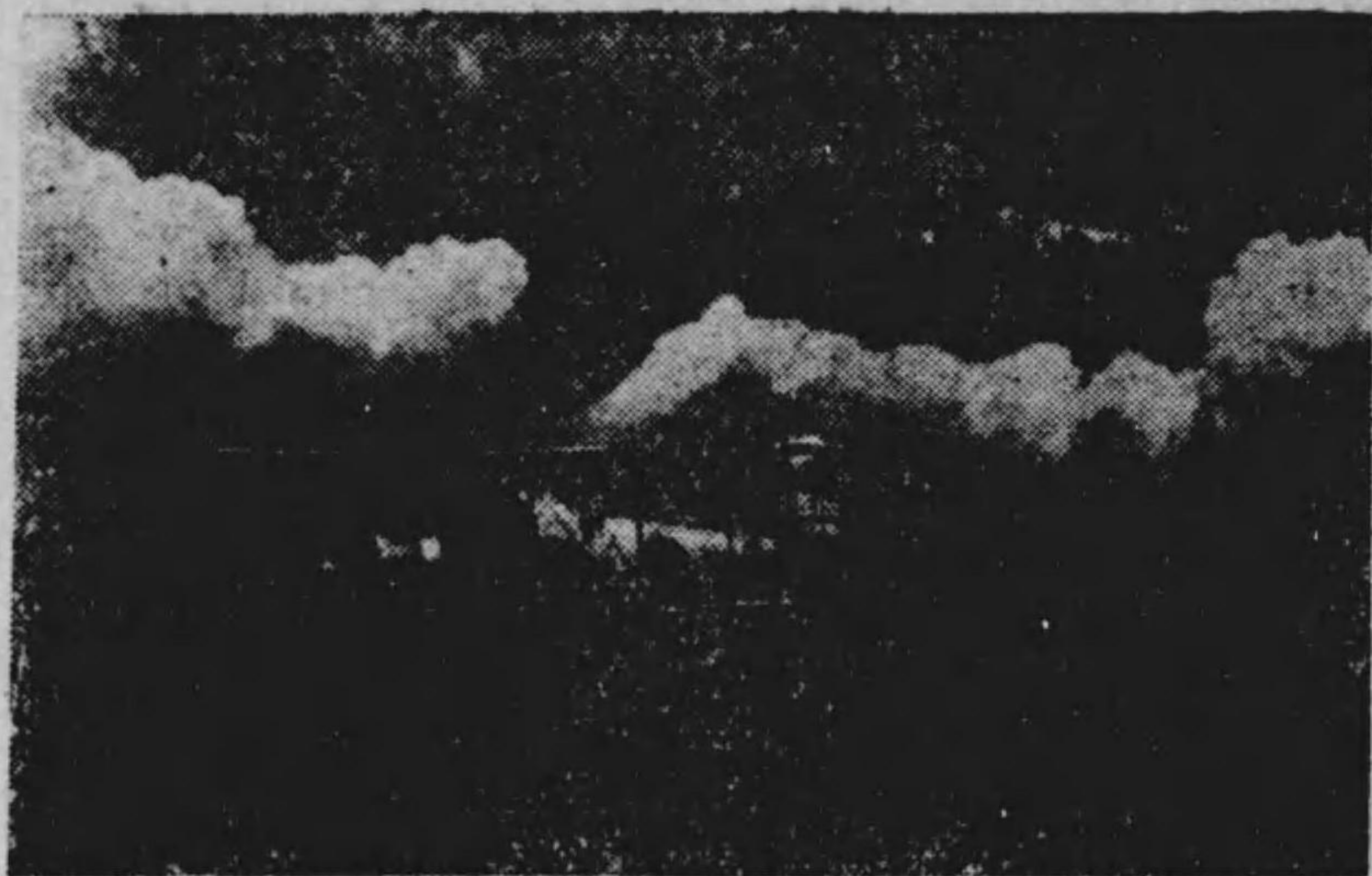
我が海軍機の發達史

空を飛ぶ驚異、昔懐し丁髷機

航空機が發明されて三十餘年、その當時を懐古すると感慨無量である。空を飛ぶ事が驚異であつた、宙返りが不思議であつた、驚きであつた。

思へば昔懐しい丁髷機である。

今事變で世界中戰史を飾る海軍航空隊、海の荒鷲の進歩の跡を訪ねてみる――



我が海軍の精銳艦上攻撃機の編隊

西曆一九〇三年米國大西洋岸の北カロリナのキツテイ・ホークで、ライト兄弟の待望久しかつた發動機裝備の飛行が前後四回行はれてから、航空距離が増して、六年後の一九〇九年には懸賞にかけられた、四〇軒ある英佛海峡が横斷し、一九二七年にはリンドバークが五千軒の大西洋を横斷し、一九三一年には遂にパングボーン及びハンドーンによつて、八千軒ある太平洋を

横断した。

一九一三年、歐洲大戦勃發の前年に、フランスのペグーが最初の落下傘を利用しての飛行に成功した。續いて彼れは最初の宙返りを行つて世間をアツと驚歎させた。

少し傾けば墜落は間違ひないものと思はれてゐたのだから、之が倒さまになつても墜落もせず安定を失はず、安全に降りたのであるから驚きであつたに違ひない。

以上の如く航空機は、日と共に、月と共に躍進を遂げ、歐洲大戦によつて更に進歩して全世界は航空學研究に熱中するに至つた。

我が國に於ては米國のライト兄弟が、世界最初の飛行をして四年後の、明治四十年に初めて空中防備に着手した。

即ち同年に東京市外中野に陸軍氣球隊が置かれ、海軍々令部では第二班に分けて、これが研究をすることになつたのである。

明治四十二年の春、第二班長海軍大佐山尾他人氏は、參謀本部の第四部長だつた大澤界雄氏を訪ねて、航空研究について話合つた。ブレリオ單葉機が美事英吉利海峡を横断して世人を驚かし

た年であつた。

「飛行機の研究をやらねばならぬが、飛行機は陸、海軍とも使ふものであるから、協力してやらうではないか」と提議したのであつた。

その後大澤第四部長が、今度は海軍々令部を訪れて、

「一緒にやりたいが、何うしてやるか、追つて詳細を相談しようではないか」と意見を交換して引揚けた。

かくして明治四十二年七月三十日、臨時軍用氣球研究所が置かれ、陸、海軍大臣の監督に屬することになり陸軍次官、長岡外史中將を會長として、左の諸氏を委員とした。即ち十四名の委員と四名の御用掛をもつて組織された。研究機關が生れるに至つたのである。

理學博士田中館愛橋、工學博士中口庄屋、理學博士中村精男、理學博士横田成年

陸軍側 工兵大佐井上仁郎、同少佐有川慶一、同少佐徳永熊雄、同大尉郡山直太郎、砲兵大尉

笹本菊太郎、同歩兵大尉日野熊藏

海軍側 海軍大佐山尾他人、同大尉相原四郎、海軍機關大尉小濱方彦、海軍造兵中技工奈良原三次

かくてこの委員会は

一、飛行機が出来るまでグライダーを研究しよう。

一、試験用の風洞を設備しよう。

一、飛行機、飛行船ともに外國品を購入して研究する事にしよう。

等の諸事項を決定し、愈々我が國の航空研究も軌道に乗つて來たのである。

この委員に選ばれてゐる海軍造兵中技工奈良原三次氏は、熱心な研究家で模型なども多數持つてゐた。そして明治四十二年十月に奈良式第一號機を完成した。

この奈良式第一號は、竹材を主材とした獨創的の復葉で、アンザニー二十五馬力發動機を取付けたもので、氏は四十二年暮に海軍を退いて、この航空機の製作に専心したのである。

この第一號機は四十三年に戸山ヶ原で、最初の試験を行つたが、推進力が不足の爲めに離陸することが出来なく遂に念願を達成することが出来なかつた。



海の荒鷲隊

その頃、相原海軍大尉は、佛國大使館付武官ルゴリヤール中尉と共に、骨組の金網を張つて復葉のグライダーを製作、上野不忍池畔で、自動車に曳かせて飛翔した。これが我が國に於けるグライダーの離陸、飛翔の嚆矢である。

この年日野、徳川大尉は歐洲に出張を命ぜられ、四種の飛行機を買求めて來た。これが我が國に輸入された飛行機の初めである。

かくて我が航空史の第一頁を飾る。歴史的飛行が行はれたのである。

時に明治四十三年十二月十九日である。グノーム五十馬力のエンジンを装備した。佛國製復葉アンリヨール・ファルマン式である。

この記録的歴史飛行は代々木練兵場で行はれた、徳川大尉がまづ三十米乃至七十米の高度で、場内を二週し、日野氏は二十米の高度で場内を一周し、群がる観集をうならせ拍手は天地も破れるばかりの騒ぎであつた。

航空研究所の試作機が周航、世界記録をつくり、朝日「神風號」が長驅、世界速度飛行をした今日の「航空日本」の飛躍に比べて、その進歩、發達、躍進の跡をみると、涙ぐましい感激である。

明治四十四年、海軍大尉金子養三氏は在佛中、パリ郊外で、氣球の自由飛行に成功した。同年四月には海軍少佐磯部鐵吉氏が、水上機の製作に成功し、この年の八月に横須賀の白濱海岸で試乗したが遂に離水しなかつた。

この水上機はゴム引ズツクの浮舟を持つてゐて、二十五馬力のアンザニー發動機を装置したものであつたが、水上滑走中に顛覆してしまつた。

明治四十二年に埼玉縣所澤に、二萬坪の飛行場が設けられ、陸軍の徳川好敏大尉を教官として飛行機の操縦術の研究が開始された。

當時の學生として、海軍からは梅北兼彦大尉と、中島知久平機關中尉の兩氏が加はり研究が開始されるに至つたのである。

一方臨時軍用氣球研究會では、山下城一海軍大尉と陸軍士官二名、技師一名をドイツに派遣して、パール飛行船を購入、明治四十四年八月に製作に着手、翌四十五年三月に完成して、大正元年八月に日本に到着した。

又明治四十四年には、容積二千九百三十立方メートルの「イ號飛行船」を作り、同七月二十八日に中島知久平機關中尉が、操縦して美事に一時四十分、距離にして三十二軒を飛行した。

これが我が國の飛行船の初まりである。



陸上攻撃機編隊

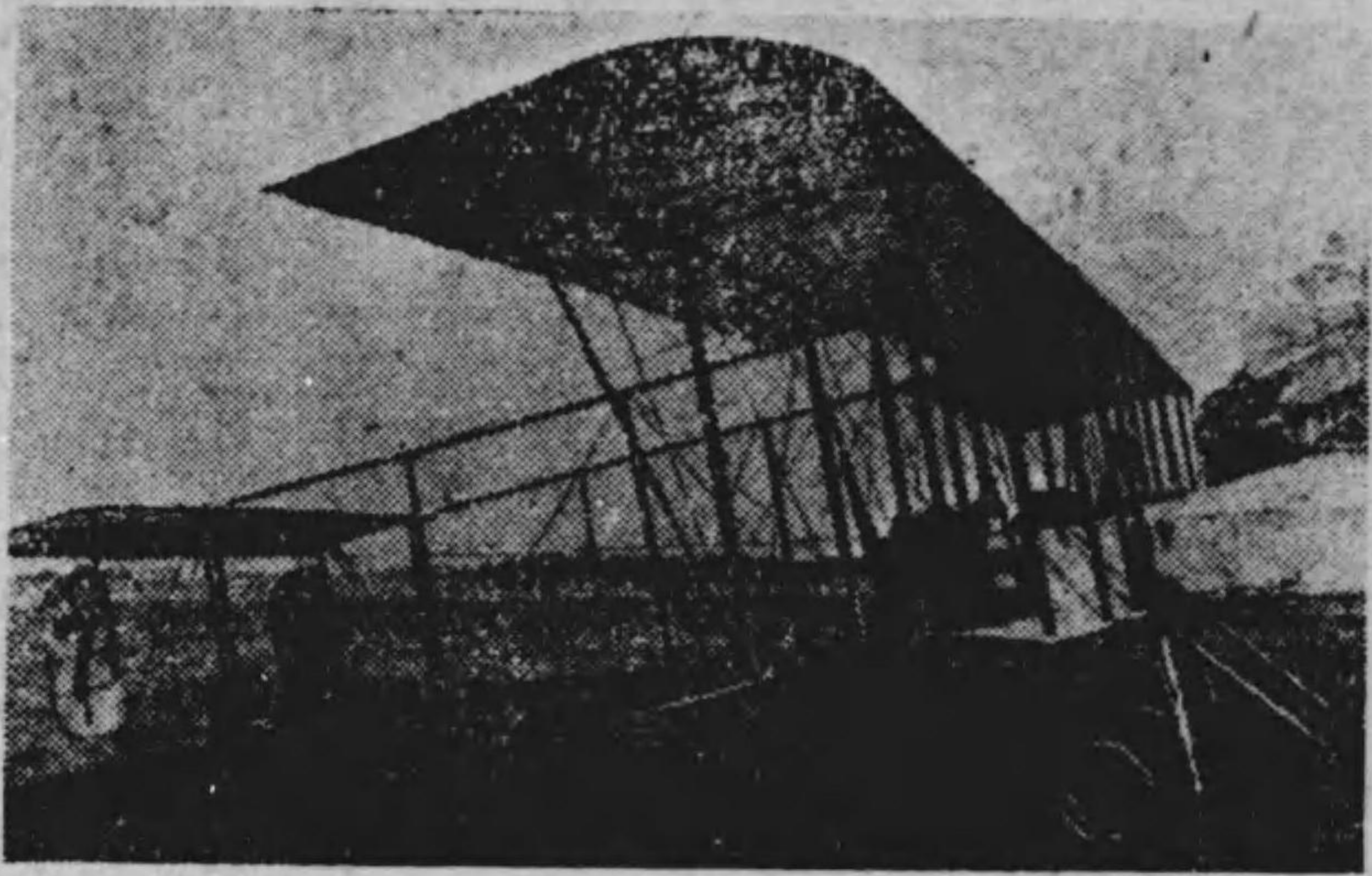
越へて明治四十五年四月二十八日、米國サンチャゴのカーチス水上飛行機學校出身のサンド・ウオーターが、モンゴリア號でカーチス水上機を我が國に持つて來て鮮かな飛行をして見せた。此れに刺戟された海軍は、独自の水上機研究機關を設けることとなり、同年六月二十八日、海軍航空研究委員會を設け、委員長山路一善大佐以下十八名の委員が任命され、横須賀水雷團を事務所として着々研究の歩を進め、漸々追濱に南北六百米、東西二百米の地を整理して格納庫と滑走臺を作つた。これが完成したのは同年七月十日である。

こゝに於て、我が海軍は人を派して、佛國のモーリス・ファルマン水上機二機を購入した。大正元年十一月六日には、金子大尉がモーリス・ファルマン機に搭乗して、三十米の高度で、海上を飛ぶこと十五分、美事に着水した。

これが我が國に於ける水上飛行機の初飛行である。

かくて着々飛行機に對する我が海軍の準備は、日一日と整のつて行つた。

同年十一月二十日、横濱沖で行はれた大演習の觀艦式には、金子、河野兩大尉の操縦する飛行機二機が参加して華を添へた。



型三良改式ンマルアフ

その翌年大正二年には、金子養三大尉、河野三吉大尉を初め、歐米から歸朝した飛行將校を指導官として、數名の選抜將校に航空術教育を施して同年五月には研究委員第一期生四名、同六月には三名の卒業者を出した。

かくして航空機は軍用として益々重要化すると共に目にみへて進歩して來た。

大正二年には特務艦「若宮」を航空母艦に改装し八月の海軍演習に参加させた。

その年の十一月十日、横須賀沖で行はれた、恒例の觀艦式には航空機四機が参加した。

大正三年には、海軍大尉井上二三雄氏が、佛國からデュルデツサン單葉機をもつて歸朝した。

更にモリス・ファルマン大型水上機が到着する等、どしどし外國から輸入の飛行機を使つて、熱心な操縦術が研究されたのである。

越へて大正四年十二月四日、横濱沖で行はれた海軍特別觀艦式には、一躍九機が参加し、これが大正八年十月二十八日の觀艦式には、十二となり、大正年間の躍進は遂に「航空日本」海の荒鷲の威力を加へるに至つた。

昭和二年十月三十日の横濱沖の觀艦式には實に八十機の航空機と、飛行船一機が加はり、翌三年には、飛行船二機、飛行機百數十機が参加したのである。

それが昭和八年には二百餘機となり、昭和十一年十月二十九日に、阪神沖で行はれた大演習觀艦式には参加艦船一〇〇隻、五八〇、一三三噸の軍艦と、航空機は數百機に及んだ。

思へば丁髷機、昔懐しい明治年間から、大正年間の躍進、昭和に至つて世界列強を壓する今日殊に今回の支那事變に於て、我が海軍機の勇猛果斷に、縦横無盡の働きの跡を、さぐるその躍進の如何に早く、その苦節、研究を涙ぐましく感ぜられるばかりである。

海軍機の種類とその任務

海國日本を守る海の荒鷲

航空機の前には國境がない、敵空襲を守る海洋第一線部隊は、帝國海軍であり、海軍航空隊、海の荒鷲である。

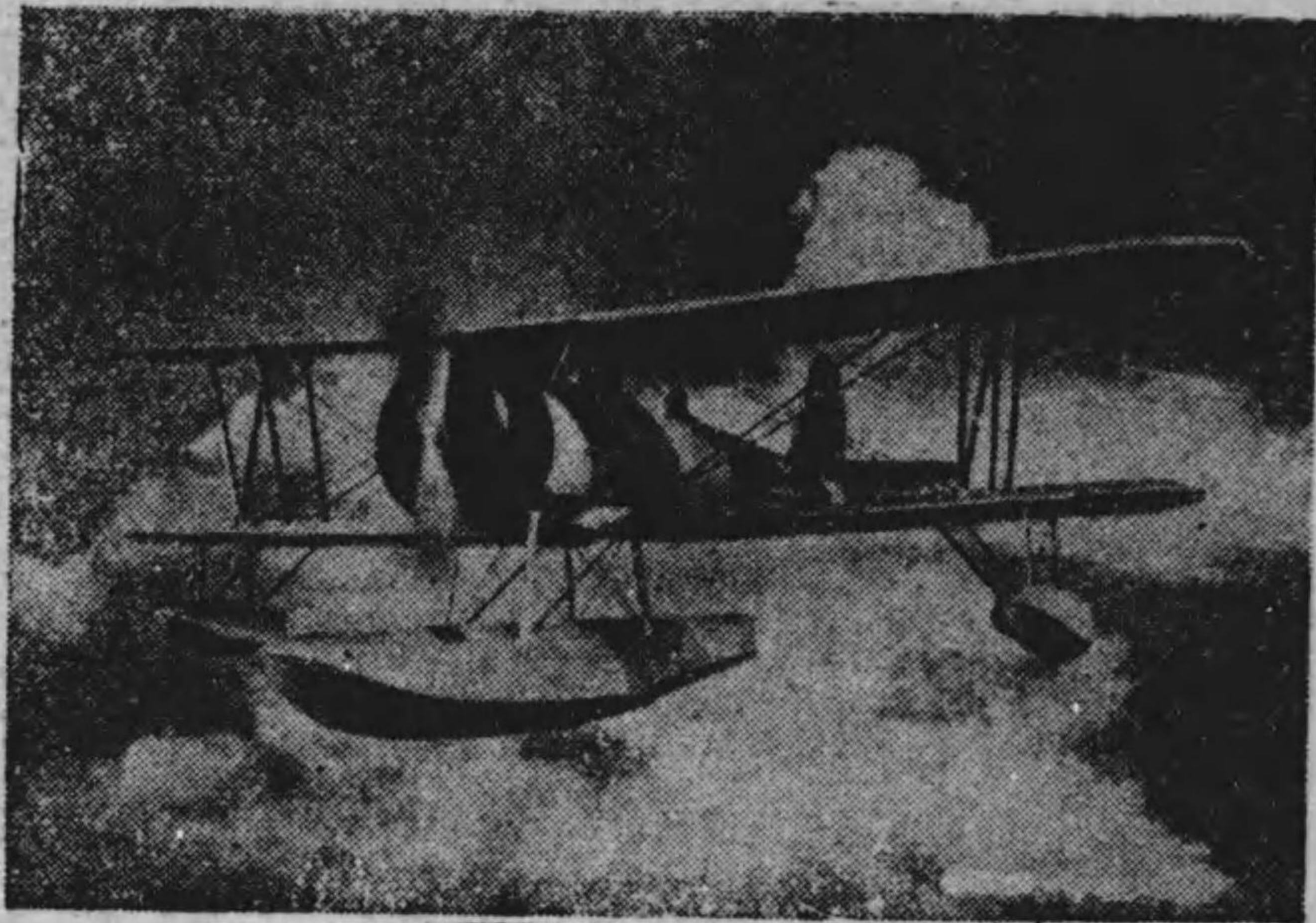
國土安全の重要任務にある海軍航空隊の持つ、海軍機はどんな種類があつて、その任務はどうであるか。

こゝに大要を述べて海軍機に對する認識を新たにしよう――

海軍の使用する飛行機の内航空母艦に搭載するものは陸上機と同様に車輪を有するもので特にこれを艦上機と呼び、母艦々上の飛行甲板を陸上飛行場の如くに滑走して發艦し、又その様に降着する。飛行甲板の無い航空母艦や戰艦巡洋艦等に搭載するものは、浮舟を備へた水上機を用ひ「デリック」によつて水上へ卸して出發せしめ、又は射出機（カタバルト）によつて艦上より射

出する方法を執り、降着は一般水上機同様海上に着水せしめたる後、艦内に揚収する方法による。又水陸兩用機、水上機又は飛行艇に車輪を併有し、水陸何れに於ても發着共に可能のものであり、又近頃同一型式の機體を水上機としても、陸上機としても使用し得る如く、隨時迅速簡單に車輪と浮舟とを換装し得る様にしたるもの、即ち水陸互換式とも謂ふべきものが多く使はれてゐるのは、用兵上將又製造工業上一の重要な問題である。又飛行艇は翼を有する「ポート」であるが、主として陸岸を基地として遠く大洋上に活躍するものである。

軍用飛行機は夫れ夫れ軍事上の各種の任務に應じ、これに達する如く特種の性能を賦與せられるのであるが、この任務の方面より見れば戦闘機、偵察機、攻撃機、練習機と分けられ、又飛行艇は哨戒機と謂ふ國もあるが、要するに遠距離偵察機の一とも見られる。但し以上の各種別は夫れ夫れ他の任務を兼ねるものが少くない。例へば戦闘兼偵察機、攻撃兼偵察機といふが如くである。以下各機種につきその性能任務等に関して述べることにする。

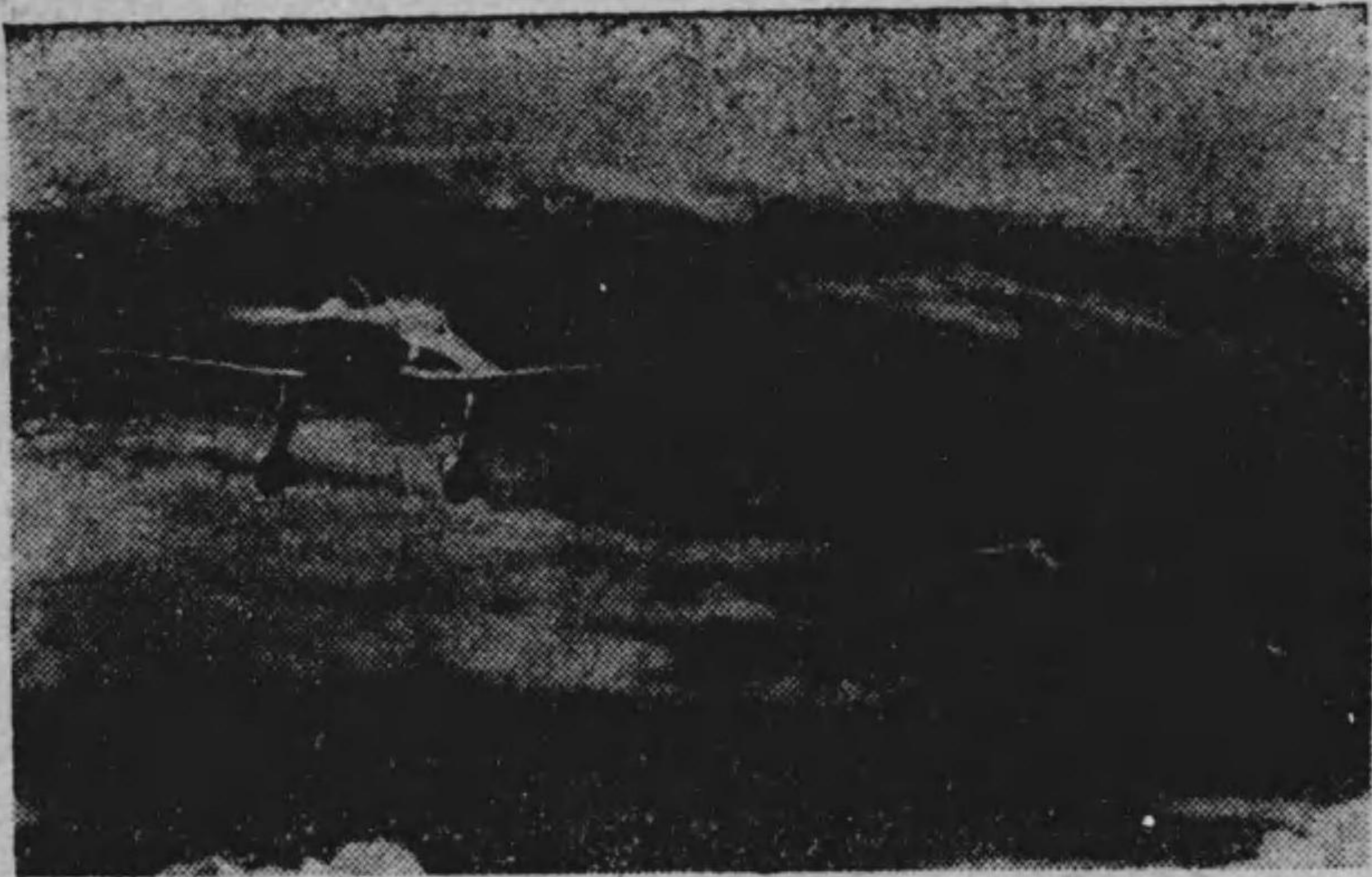


水上偵察機

△戦闘機

戦闘機の主任務は空中戦闘である。即ち敵機を撃墜して空間に敵影なからしめ、制空の實を擧げん事を目的とするものである。戦闘機戦闘又は味方艦隊の上空を警戒して來襲する敵機を邀撃し、或は味方の偵察攻撃諸飛行隊を掩護して敵機の阻止を撃攘することもあり、或は又敵艦々上に降下轟進して機銃弾を雨注し、或は輕爆彈を以て潜水艦等を破壊することもある。故に戦闘機はその任務上性能最も輕快、駿速、激烈なる空中操作に堪ゆる如く機構は特に堅牢なるを要する。従つて形態も一般に小さく、單座のものが多くこれに強馬力の發動機を裝備する。今日各國の主要戦闘機は約六〇〇馬力以上、中には七〇〇馬力、又は六〇

○馬力、或はそれ以上の發動機を裝備するものもあり、速力四〇〇軒時又はそれ以上に及ぶものすら出現せんとするに至つた。一方戦闘機の性質として、特に重要な上昇力に於いては三千米約四分、六千

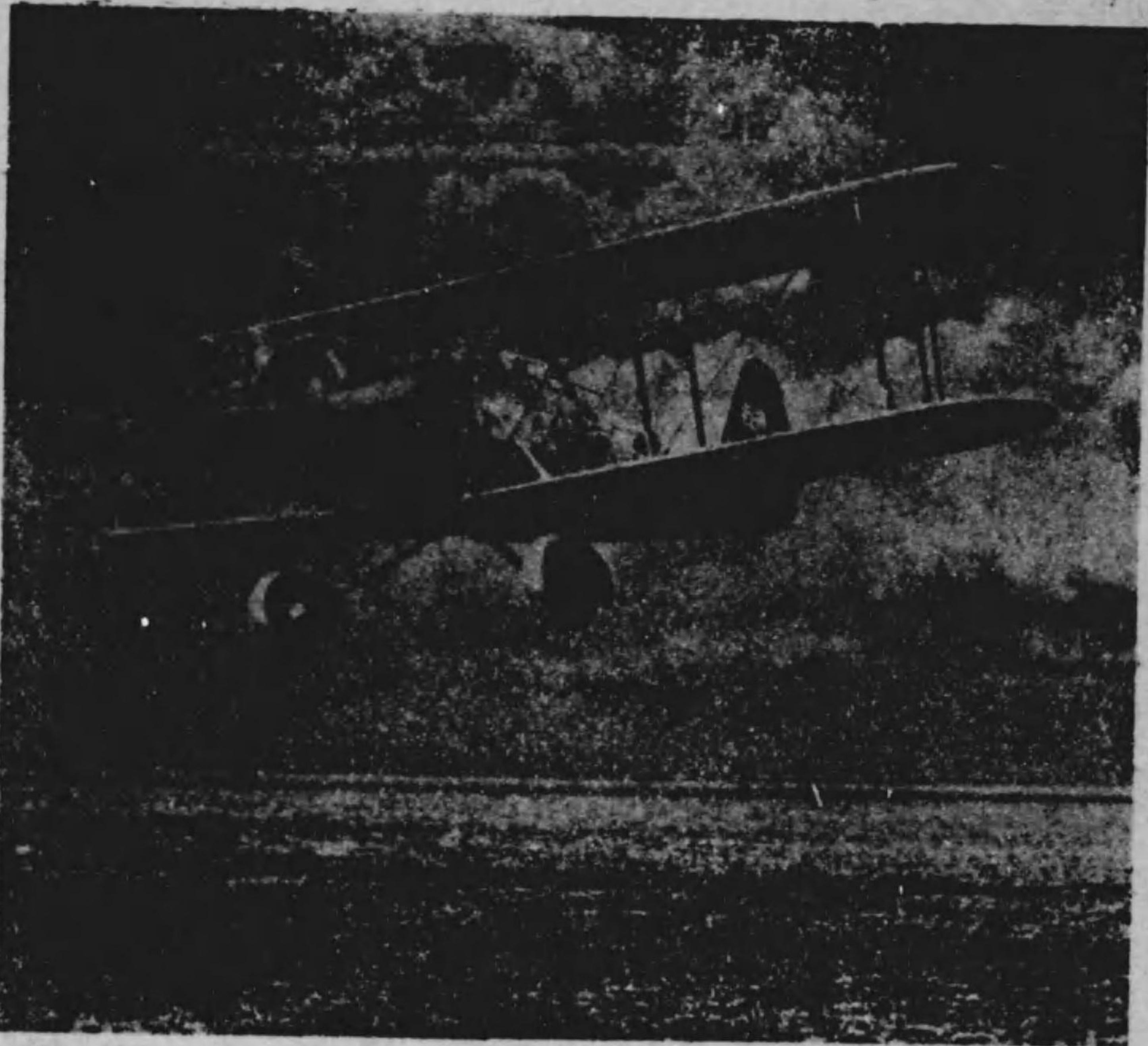


海軍精銳の最新式艦上戦闘機

米約一〇分といふが如き優秀なるものすら出現し、又最大上昇限度九千米に達するものあるに至つた。戦闘機の主兵装は勿論空中戦闘用の機銃である。單座機は「プロペラ」の翅の回轉の隙間を通して前方を射撃する固定銃二挺乃至それ以上を裝備し、自由自在に自己の飛行幾を操縦して敵機の弱點たる死射界へ死射界へと突進し有效なる猛射を加へるのである。

◇戦闘機

帝國海軍の九六式艦上戦闘機などは詳細の性能は極秘に屬してゐて發表されないが列國のものに比較して毫も遜色のない優秀機である。



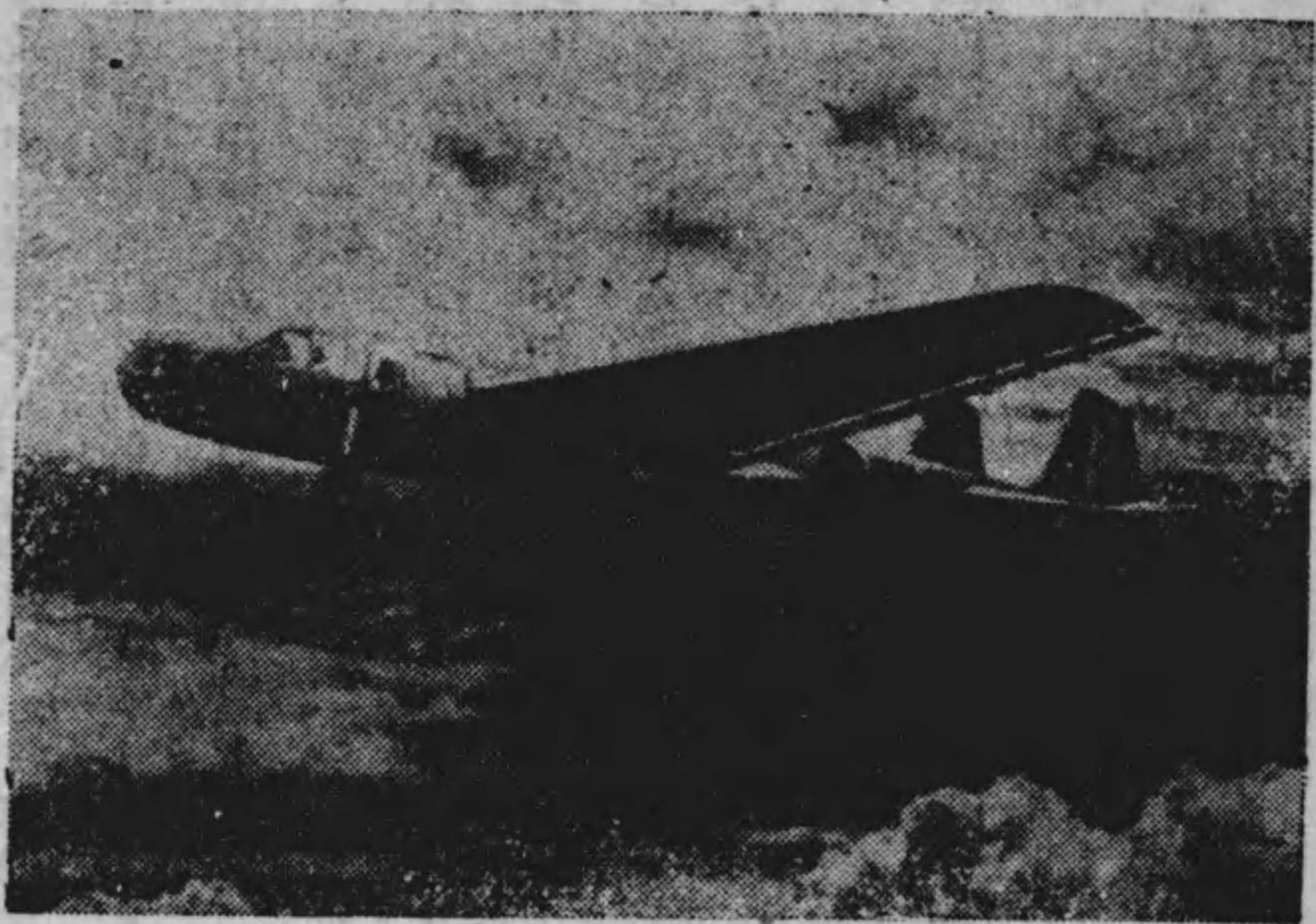
艦上攻撃機

△偵察機

偵察機の任務は極めて廣汎である。或は艦隊前路の哨戒、潜水艦に對する警戒或は彈着や敵艦の針路速度等の觀測、魚雷機雷に對する見張、或は艦隊在泊中の港灣泊地の警戒や或はまた遠く敵艦隊や陸上の搜索偵察等數ふるに暇もない程であるが、之等は搭乗員の優秀なる偵察眼と共に偉大なる通信力に俟たねばならぬ。故に偵察機は多く複座又は三座であり、中に

彈着觀測機として四座のものもあり、従つて前項の戦闘機に比すれば素より形態も大となり爲めに速力、上昇力等の性能も戦闘機の如き輕快駿速を求め難い。然しながら敵戦闘機の來襲を撃攘して本務の達成に遺憾なからしめるには、自然出来る限り性能の優秀を圖ることになるのであるが、近時要する場合戦闘機の任務をも有効に果し得る如くした偵察兼戦闘機とでもいふべきものも出現して居る。従つてこれらは大抵複座である。偵察機は本來の任務の偵察以外に煙幕展張機として用ひらるゝことも多く、又比較的の小形の爆彈を搭載して爆撃を敢行することも少くない。今日航空母艦以外の艦船には最も多くこの偵察機を水上機として搭載するのが各國一般の状態であるが、かくの如き偵察機は水陸五換式とし、所要の場合直に艦上機としても用ひ得せしめ或は亦水陸兩用機の型式のものを用ひ居る國もある。

今日偵察機は約四五〇馬力乃至六〇〇馬力附近のものが多く、前記の兼戦闘機といふものではなくも、その性能の優秀なるものありては速力二七〇軒時に及ぶものもあり、上昇力も三千米へ約一〇分にて到達し上昇限度六千米以上に及ぶものもあり、稍舊式の戦闘機は到底この新偵察機に及ばざる状態にあるのである。一方に於ては潜水艦に搭載する偵察機は一〇〇馬力



海軍陸上攻撃機

前後の小型のものであり性能も顯著なものがあ
る。

◆偵察機

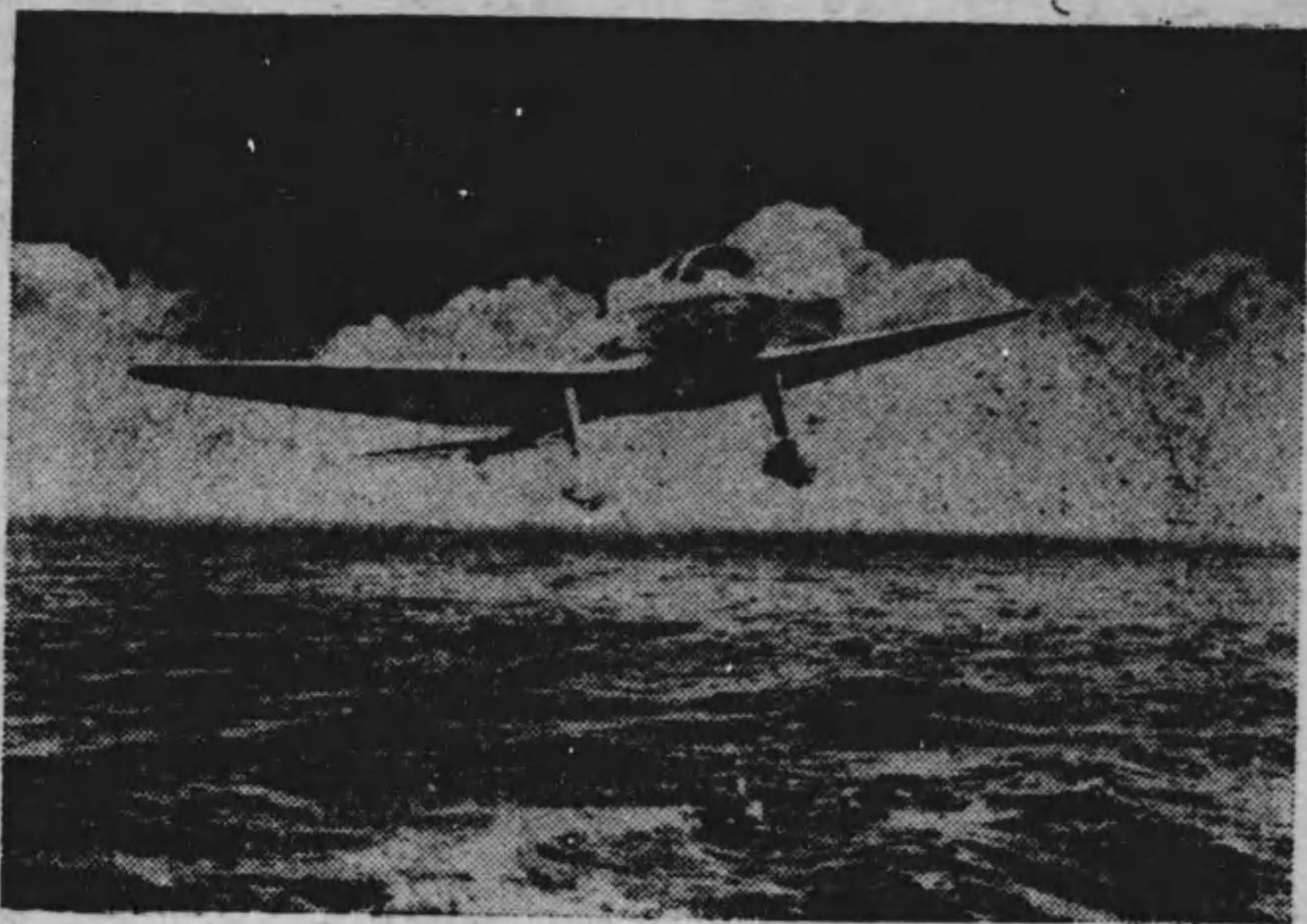
偵察の任務を果し得る優秀なものが多いがこれ
も發表を許されてゐない。

△攻撃機—「雷爆撃兼

偵察機—輕爆撃機」

攻撃機は爆撃や魚雷等で敵艦や要塞等を攻撃する所謂爆撃機雷撃機である。而してこの爆撃機雷撃機は夫れ夫れ別個に専用機とするものも絶無ではなく、寧ろ將來或はかくの如く特に専用のものが出来るかも知れないが、今日の所では兩者同一機を用ひ所要の場合爆撃機とし、又雷撃機とするのが一般である。攻撃機は一般に多量の爆弾等を搭載し得る爲めに搭載力の甚だ大なるを要求せられ、従つて五、六百馬力乃至それ以上の大馬力發動機一基乃至數基を裝備し、一トン乃至數トンと云ふが如き多量の爆弾を搭載し、又は大なる魚雷を裝備して襲撃する。然し一面海軍用の攻撃機は艦内收納取扱ひといふ點より無制限に大きなものを用ひられない。今日艦上攻撃機としては各國共先づ五、六百馬力またはそれ以上の單發動機式が多い。

今日各國の攻撃機には約二七〇軒の時速、三千米約一〇分の上昇力、上昇限度約六千米に達するものも決して稀ではない。これ敵艦隊襲撃に當りては爆弾携行量の大なると共に、一方に於ては出來得る限り輕快速度を保持し襲撃の効果を最大に發揮すると共に、一面敵機または敵艦高角銃砲よりの損害を受くることを少くするの要があるからである。近來高空より急降下によつて敵艦上に着進殺到して爆撃する方法をとりこれに適する特種爆撃



最新式海軍戦闘機

機も考へられて居る。輕爆撃機といひ又は爆撃戦闘機といふものがこれである。

◇攻撃機

艦上攻撃機は陸上機と同様車輪をつけてゐるものであるから、航空母艦からも陸地の飛行場からも自由に發着が出來ると共に、その威力はすばらしく増加して來るのである。

△飛行艇—〔哨戒機〕

飛行艇は前にも述べた通り速距離偵察機の

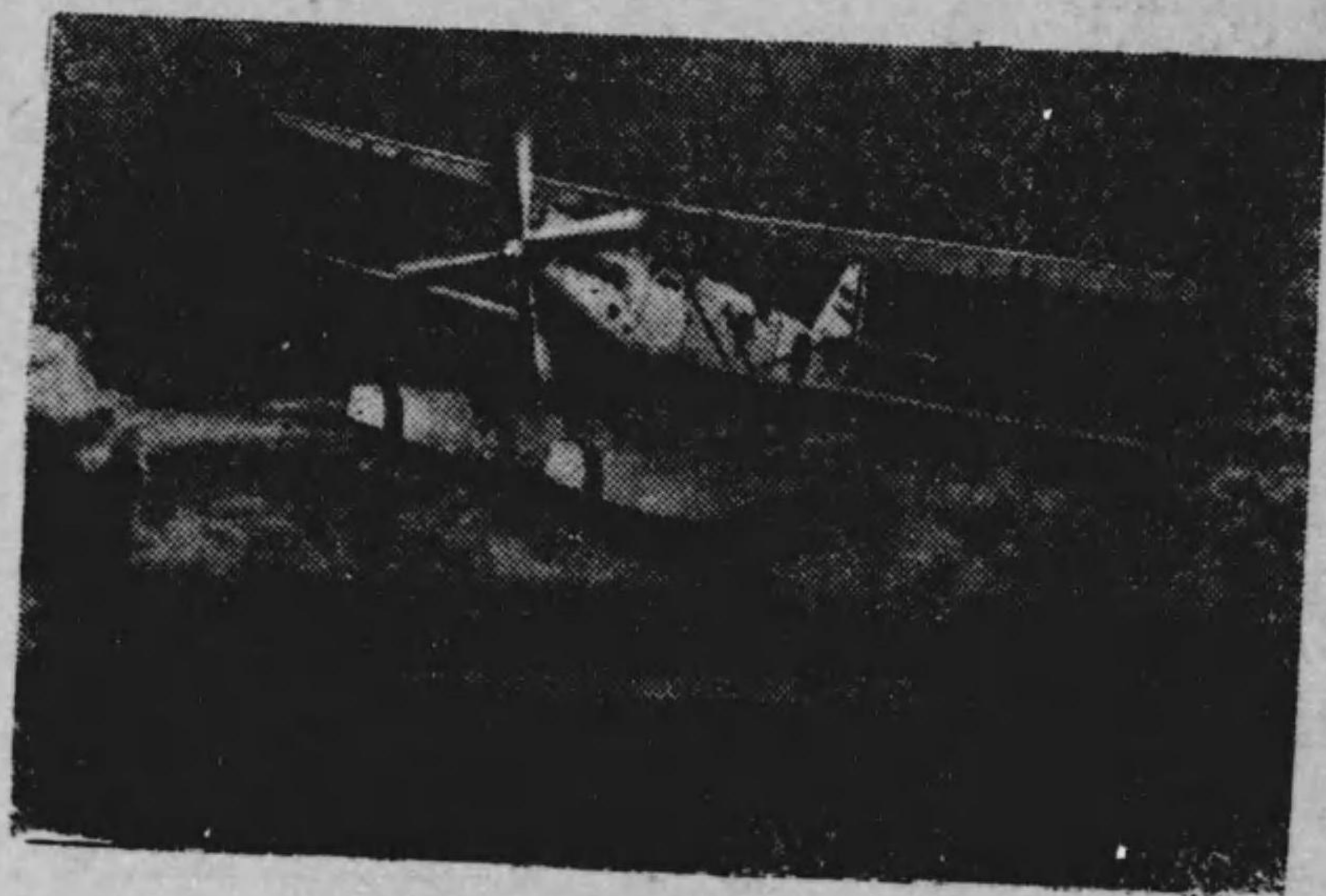
一種とも見られる長時間哨戒の任務に最も適して居る。米國では哨戒機といつて居る。飛行艇は海岸を基地として遠く太平洋上に遊弋し、或は又艦隊に随伴して搜索偵察乃至攻撃の任に従ふものであつて海軍用としては勿論極めて大切なる機種であるが、又一方本邦の如き海國の航空運輸用として亦大いに着目を怠るべからざるものである。飛行艇は「ボート」に翼をつけた様なものであるから海上の航走にも適し、特に耐波性に至つては一般水上機の及ぶ處でない。飛行艇は長時間遠距離に行動するを要することの爲め自然益々大型のものが出現する。數年前迄は四、五百馬力またはそれ以上のもの三基四基乃至數基を裝備するもの出現し、獨國「ドルニエ」DOXの如きは六百馬力十二基を裝備する大型艇として初めて出現し、全世界驚心駭目の焦點となつたが今後かくの如き大型飛行艇の哨戒機乃至攻撃機としての將來については篤と考究せねばならぬ所である。

◇飛行艇

飛行艇は我が海軍の一威力であるが、その型、馬力、航續力等については、發表を許されてゐない。

△練習機

練習機は初期の操艇を主として練習せしめるものであつて、陸上練習機と水上練習機とがある。速力上昇等の能力の特に大なるを要求せず、初歩の飛行教育に便利で安定もよく、且各種の高等飛行に堪へ、又無理な操縦や取扱ひに對しても頑丈なるを要する。今日八十馬力より百二、三十馬力のものが最も多く用ひられて居る。



(機察偵軍海) 機きばタダ

海の荒鷲

三四

機名	型	馬力	航続力
三式二號陸上	複葉	一三〇	
九三式陸上中間	複葉	三〇〇	
九〇陸上機作業	複葉	三〇〇	五時間
九〇式水上	複葉	一三〇	
九三式水上中間	複葉	三〇〇	
九〇式艦上練習戦闘機	複葉	一五五	三時間

△陸上攻撃機（中型攻撃機）

今回の支那事變で、我が海の荒鷲、海軍航空隊の活躍は、世界航空戦史を飾るものである。ことに中南支空爆の波洋爆撃隊の活躍こそ驚嘆に價するものである。長翔よくその目的を達し得た事は、一つの驚異に違ひない。

我が海軍航空機の現勢力

空軍充實を期す列國

歐洲大戰によつて航空機の威力を知つた各國の空軍は、大戰閉幕後實に最少限十一倍の勢力となつてゐた——その後の擴充は年々驚くべき尤大豫算を計上して、今日の百、千倍の空軍を組織したのであるが尙足らずとしてゐる。

世界の空軍擴充競争は何處へ行く——

海の荒鷲、海軍航空隊の根據地、追濱飛行場が完備したのは大正四年の事である。

當時は航空將校は僅々十數名に過ぎなかつたものであるが、七年には航空隊が五隊編成された。越へて大正九年には十七隊計畫が進められ、まづ七隊が増設された。

大正十年には、霞ヶ浦、横須賀に歐洲大戰に参加の外國士官を招いて、火の出る様な練習が行

海の荒鷲

三五

はれてから、その数も次第に増加し、更に航空機も又一年毎に躍進と、増加をみた。かくて昨年迄に海軍陸上部隊は三十九隊、横須賀、霞ヶ浦、横濱、木更津、館山、吳、佐世保、佐伯、大村、鹿屋、舞鶴、大湊、鎮海等々主要地に配置されるに至つた。これに加ふるに海上部隊である。

航空母艦、水上母艦については「航空母艦の話」欄で詳しく述べた通りである。

X

然して列強國の空軍現勢力はどうであるか

英國は航空母艦六隻（一一五、三五〇噸） 米國は四隻（一〇〇、四〇〇噸）

佛國は一隻（一一一、一四六噸） 蘇國は一隻（七、六〇〇噸）（昭和十三年四月一日現在）

と云つてゐるが、尙建造中のももある。

然してこの他軍備制限條約の規定たる航空母艦に該當しない、水上機母艦とか、或は飛行艇母艦と言ふものは

米國二隻（「ライト」排水一一、五〇〇噸、速力一五節の飛行艇母艦及び「バトカ」排水一六、

八〇〇噸、速力一一節）

英國二隻「ベガサス」排水六、九〇〇噸、速力一一節及び「アルバトロス」四、八〇〇噸、速力二一節）

佛國一隻「コンマングンテスト」排水一〇、〇〇〇噸、速力二〇・五節）等がある。

X

航空機の前には、山も、河も、海洋も、國境もない。

敵空襲を守る第一線は何んといつても海上にあり、そこに守るもの帝國海軍であり、海軍航空隊海の荒鷲である。



海の荒鷲

敵機を國內に近寄せない事が、國土安全の第一義であるを思へば海荒鷲の責任は重である。今回の事變をみても制空權の確保といふ事が如何に重大であるか知られる。制空權の確保こそ、戦勝を導くのである。

空中戦の華、戦闘機の機銃

プロペラの間から出る弾丸

戦闘機の空中戦は機関銃の發射によつて敵機撃墜戦である。

従つて勝負は一瞬にして決定すると云へる、この弾丸はあの急廻轉する

プロペラの間から發射されるのである。

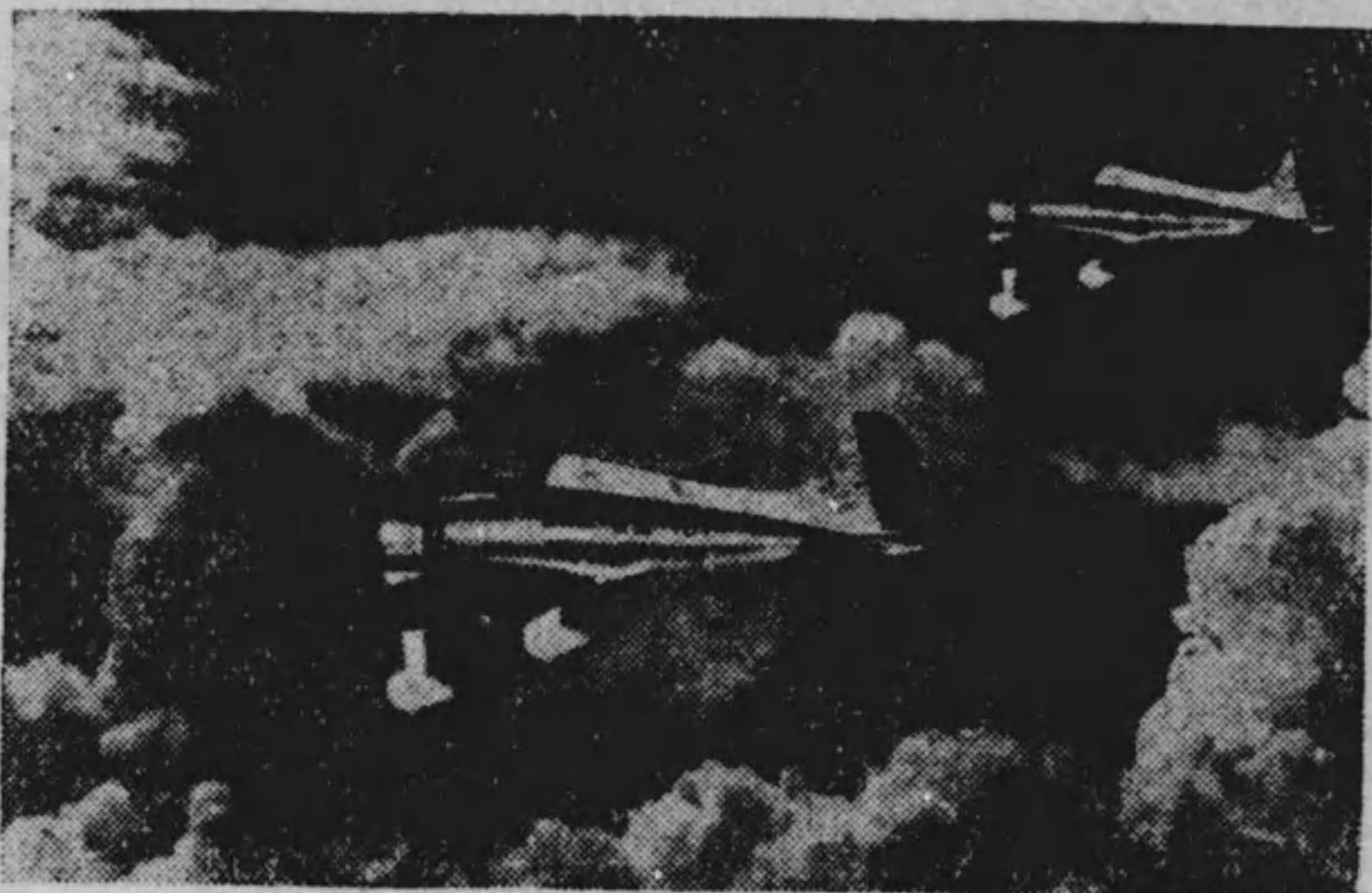
あのプロペラの間から、どうして弾丸が發射されるか――

空中戦で戦闘を続け、敵機を撃墜する戦闘機の、機體に固定された機関銃の弾丸は、どうしてあの急速に廻轉するプロペラの間から發射される仕組になつてゐるか。

廻轉するプロペラの間から、弾丸が出る事は一見、極めて不可思議の様に思はれるが、理窟をさぐると何程と、うなづかれる事が出来る。

これはオランダに於ける風車から發明されたものである。灌水の爲めにある風車、それがオランダの名物でもある。その廻轉する風車の間へ、子供達が石を投げ込んでゐた。四枚羽根の風車がクルクル廻る間に石が飛び込む、理窟を考へると不思議とも思はれるが實際は石は羽根にも當らず通り抜けたのである。こんな簡単な事から驚くべき發明は完成されたのである。

プロペラの廻轉は毎分一、二〇〇乃至一、八〇〇である。(最も速度記録飛行の場合には二、〇〇〇から二、五〇〇或はそれ以上の廻轉をした場合も無いではない)。



海軍精銳戦闘機の編隊

尙ほ機銃(機關銃)の弾丸は毎分一、〇〇〇發であるから、ペラの回轉中から射出出す事は困難ではない事になる。

この機銃はプロペラ圓の外方、或は翼の中に裝備されて發射される。

今回の支那事變で既に南京、南昌、漢口等の上空に於て、我が海軍機が俊敏隼の如き空中戦闘に於て、敵機を八十機、或は五十機と撃墜して世界空中戦史の一頁を飾る華々しさを諸君は忘れないであらう。

その間速度毎時四〇〇キロ程度の、急速力で想像するだに勇ましい血戦が行はれる。

急降下、反轉、橫轉、急旋回、錐揉等々の凡ゆる高等飛行の秘術を盡しての戦闘は、僅々數分間で勝負が決定してしまふのである。

つまりこの華々しい空中血戦に於ては、航空機と、航空機の接近速度は毎秒二、三百メートルであらう。

従つて、この程度の有効射程を持つてゐる機銃の、一回の遭遇發射弾丸は僅かに數發に過ぎない事になる。それでも口徑一二ミリ以上の機銃では完全に頑丈な金屬構造の敵機を撃墜する事

が出来るのであるから、その威力は驚るべきものである。

かくの如くで如何に華々しい空中戦闘であつても、弾丸を百發も、二百發を身に受けて射墜される様な事はないであらう。

次に各國の優秀機單座(一人乗り)をみる。

機名	型	最大速度(時速)	航續力(杆)	武装	
米國	カーチスホークIV	複葉	四〇〇	九三〇	—
	ノースロップXF二T一	低單翼	四〇三	—	—
英國	フェアレーフアントム	複葉	四三五	七〇〇	砲一 銃四
	グロスターグラディエーター	同	四一九	七三〇	—
佛國	ミュロー一九〇C一	低單翼	四八〇	九六〇	砲一 銃二
伊國	カプロニCH一	複葉	—	七〇〇	—
蘇	ZKB一九	低單翼	—	九〇〇	銃四

尙この他複座(二人乗)及び多座の戦闘機は、自ら單座とは違つた威力をもつてゐる。

機名	型	速力(時速)	航空(燃料)	武装
米國 セヴアスキーSEV二P	低單翼複座	五〇〇	一、七七〇	—
佛國 ミュロー一八〇C二	高葉複座	三八〇	九五〇	砲一 銃一
アンリオ二二〇	單高葉(三座)	五二〇	—	砲二 銃二
伊國 プレダ六五	低單翼複座	四五〇	一、二〇〇	—
和蘭 フオツカーG一	單中葉複座	四五〇	一、六〇〇	砲二 銃三

等、戦闘機の生命が空中戦にある以上、各國は競ふて、攻撃力のすばらしい機關銃を装置することに苦心をしてゐるのである。

航空母艦の話

洋々たる海上に浮く飛行場

海軍陸上航空部隊と協力して、洋々たる海上にあつて敵機を、我が國土に近寄せない海上部隊は、敵艦攻撃、偵察、魚雷及び潜水艦の發見等々その任務は重い。

海上に浮いてゐる空の護り、海の飛行場それは航空母艦である。

その航空母艦について述べやう——

洋々たる海原に浮いて海洋生命線を護る海の飛行場、航空母艦はどんな仕組に出来てゐるか、又どういふ装置で艦上から飛行機を飛ばせたり、着艦させたりするか、更に我が國の航空母艦と列強のものと比較してみても、どれ程の違ひがあるかについて、一般に判り安く、了解出来る様に極めて通俗的に記してみることにしよう。

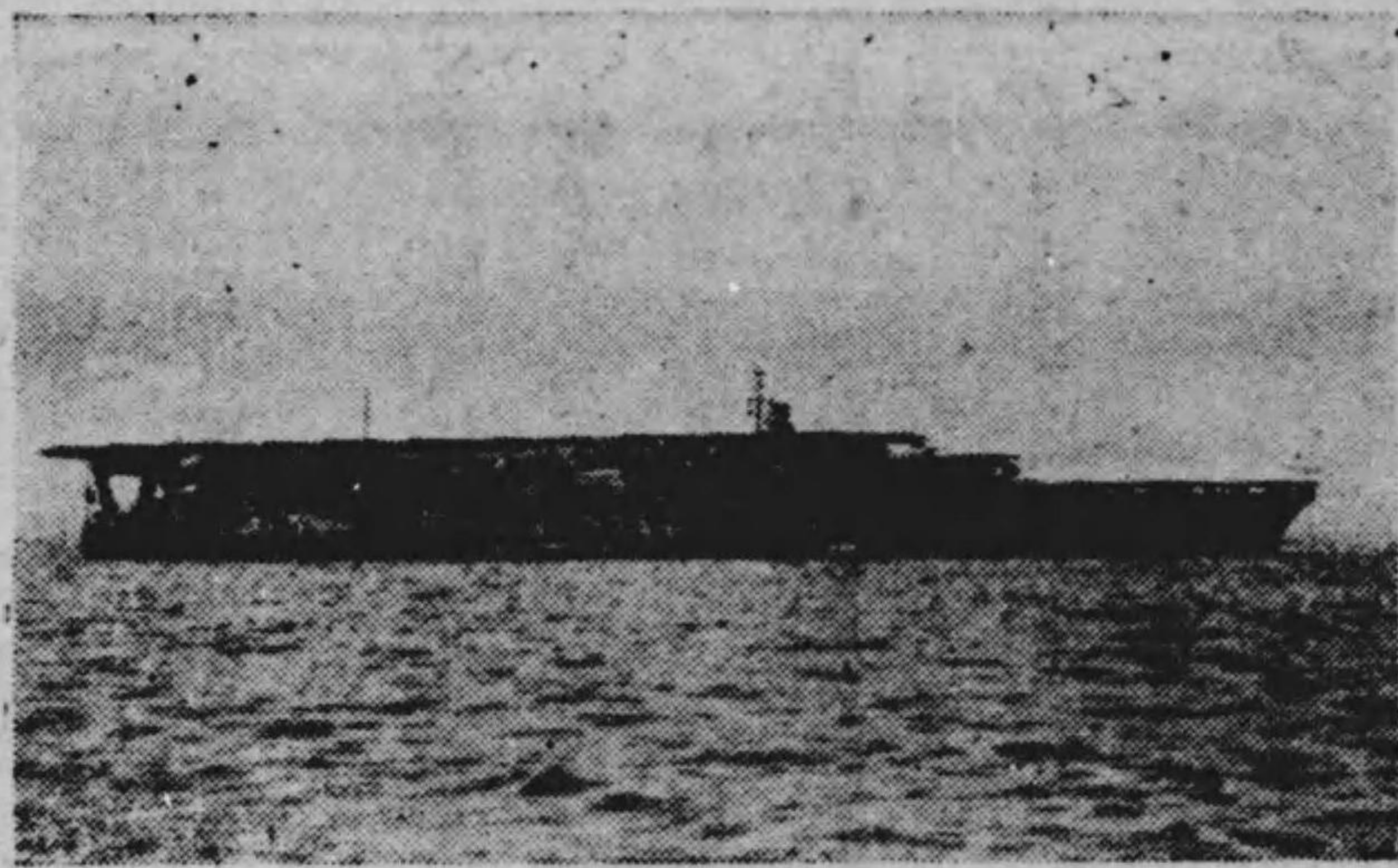
航空母艦が普通の軍艦と違つてゐる特徴は、一番上の甲板から飛行機が、自由自在に出来る様に平な飛行甲板となつてゐる事で、この平な部分が陸地と同様の飛行場の役割を演ずるのである。

航空母艦の飛行甲板にはフラツシュ・デツキ型と、アイランド型の二種類がある。

フラツシュ・デツキ型といふのは、甲板の上に何等の邪魔物がなく、見通しがよく利く様に出来てゐるものと言ひ、これは飛行機の發着には一番いいが、飛行機を指揮したり、大砲を射つには都合が悪く、これはアイランド型、つまり島の様に艦測に司令塔が出たり、煙突が出てゐる方が都合がいい譯である。

この何の障碍物のないフラツシュ・デツキ型は我が國の「加賀」や「赤城」の様なものがあり大砲や、マストが甲板に出てゐるアイランド型は米國の「サラトガ」「レキシントン」等がある。

こゝろいふ譯で双方に、優劣長短があつて、どちらとも決定出来ない問題ではあるが、將來この二つの型の何れに赴くか、或は更に新しい型のものが發明されるが、今足座に斷定は出来ないが各國はそれ／＼非常な苦心と、研究費を拂つて躍進を圖つてゐる。



(本日)賀加艦母空航

飛行機の離着艦はこの飛行甲板の上であるが、さてこの飛行機を納めて置く所は何處かと云ふと、甲板の下方に格納庫があつて、一段とか、二段とかある格納甲板と、飛行甲板との間に、飛行機を上下するには、昇降機を使つてゐる。だから例へば攻撃力の素晴らしい大きな爆撃機を載せようとしても、この昇降機に載せきれない様な、圖體の大きなもの、大型機は駄目である。

そこでこの航空母艦に搭載する艦上機は、戦闘機、偵察機、攻撃機、雷撃機等で、なるべく小柄で然も威力を持つたものばかりである、更に攻撃機になると大低翼を疊んでこの昇降機に載せて上げたり、下げたり又格納庫に入れて置くのである、更にこの格納庫の下部には飛行機を修理する工場もあれば、飛行機に載せる兵器、彈藥等の倉庫も設

備されてゐる他、その他の機關設備に至つては他の軍艦と何等變つた所がない。

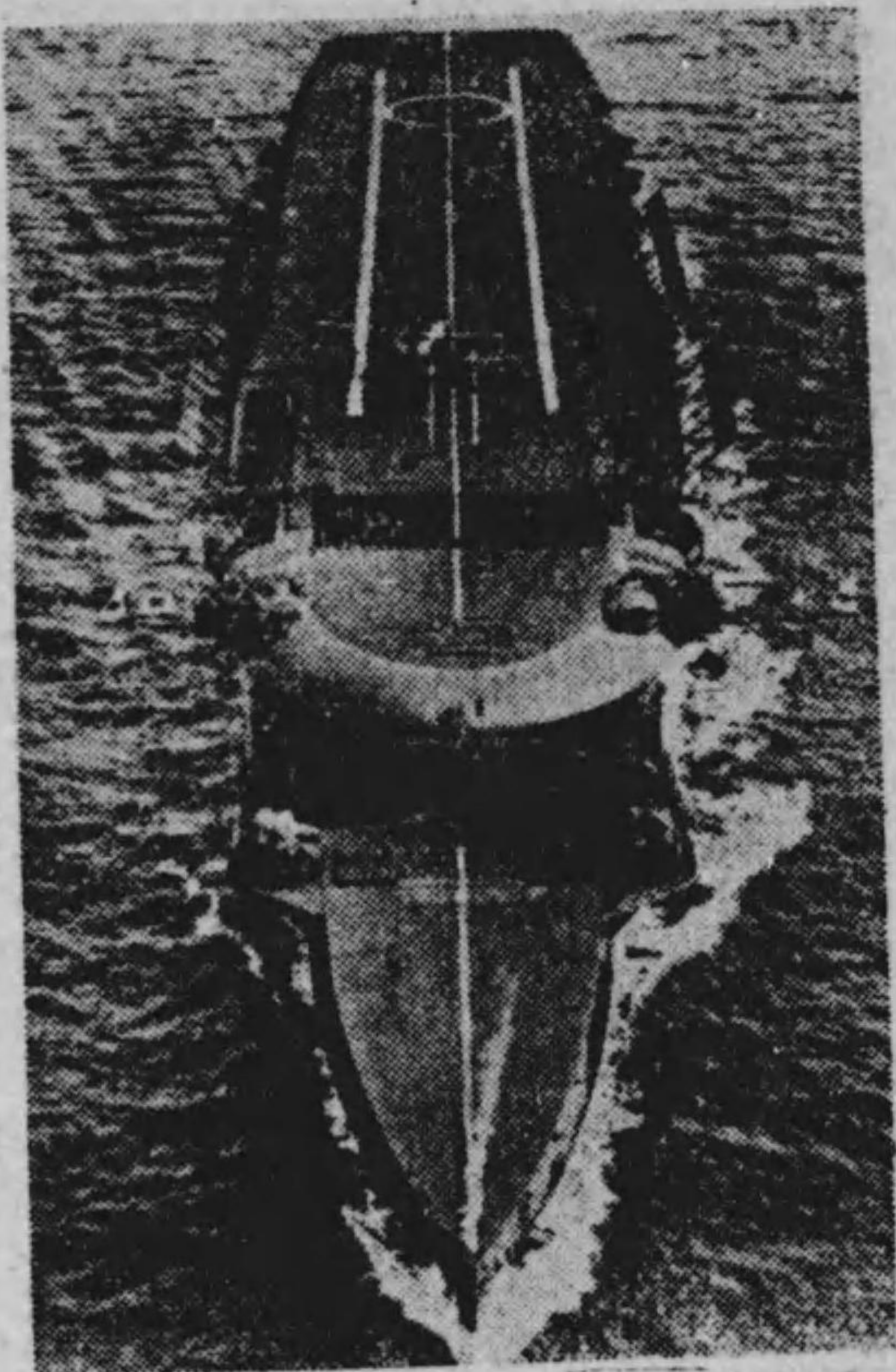
さて航空母艦から飛行機はどうして發着するかについて述べよう。

その前に飛行機の上昇、下降について説明しておく必要がある。

諸君飛行機は風に向つて飛び上り、風に向つて下降するのが原則である、即ち風に向つて飛ぶ事は、自分身體がプロペラを利用して風を起す位であるから、風に向つて進めば早く浮力がつく譯である、更に風に向つて下降する事は、着陸着艦或は着水する時に例へ、速力を落して來たとしても、空中ではブレーキがきかない、その時風に向つて下降する時は、風がブレーキの變りをして呉れるのである。

さて航空母艦だが、これは前に述べたフレツシュ・デツキ型にしる、アイランド型にしる飛行甲板があると言つても陸地の飛行場、何萬何十萬の滑走路に較べれば猫の額位なものである、例

フニリアス(英國)排水二二、四五〇噸 速力三一節



へば我が國の「赤城」は全長二三二・五六米で幅巾が二八・〇四米であり「加賀」は長さが二一七・九三米で、幅巾が三一・二四米であるから、陸地の飛行場とは比較にならない。

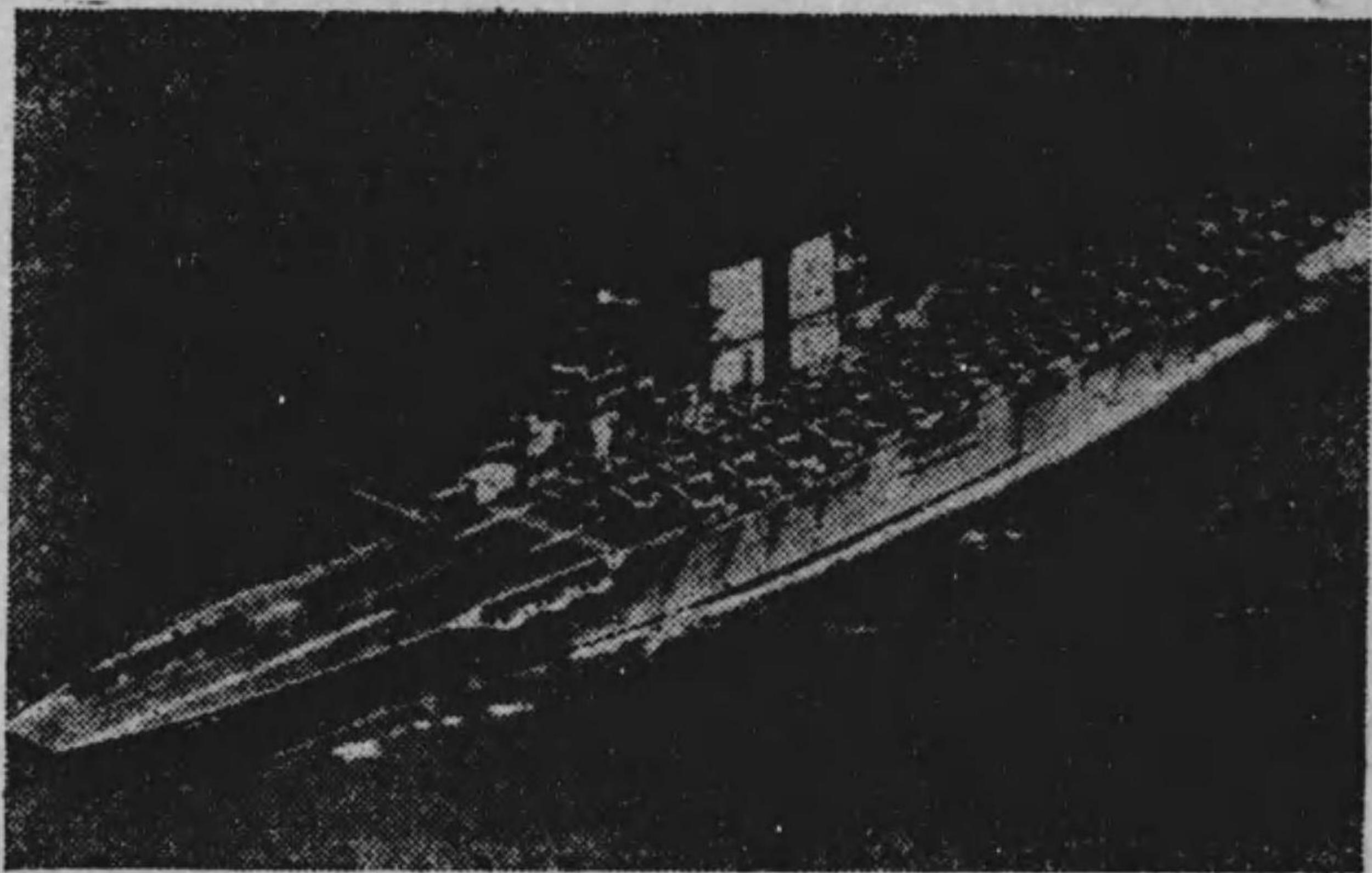
かういふ譯で狭小な飛行甲板で發着せねばならぬので、航空母艦に乘込みの荒鷲は非常に技術が優れてゐなければならぬ。

まづ出發する時は、母艦はおだやかな海上に停つてゐる譯でなく、大速力で丁度風の吹いて來る方向に進む、その時搭載機は艦首をめがけて急進する、かくて僅かな滑走で廣い飛行場を滑走したと同様の結果になる、又着艦する時は、母艦は風の吹いて來る方向を示しながら、急進するのである。この時着艦姿勢をとつた航空機も、又風に向つて下降して來る、前述の風がブレーキ

の變りとなつて安々と着艦が出来、更に甲板へ車輪がついてから、出来るだけ滑走距離を短かくする爲めに、然も早く確實に停止する爲めには甲板の上にケーブルがひかれてあり、航空機の後のカギ、尾輪に引掛る様に出來てゐる、アメリカの航空母艦「サラトガ」にはこのケーブルが九本装置してある。

以上の様な譯で航空母艦が、風の方向に猛進しない限り、航空機の發着は出來ないだから、もし實戦の場合に主力艦隊が、南の方へ進みこゝで一戦を交へるのに、北から猛烈な風が吹いて來るとすれば、母艦は注力艦隊とは離れて、反對の方向に進まねばならない、その時には母艦には護衛のために〇〇がついて行く事になる。

尙着艦の時、波が高くて船體が激しく動揺すると危険であるから、小さい航空母艦には自動的にその動揺を留める、特殊の装置をしてゐるものもある、更に又煙突から吐く煙が四邊の氣流を悪くする事も當然であるから、我國の「加賀」等の様に、飛行甲板の下を横に長く抜けて、艦尾に引張つたのもある、何れにしても出發より着艦の方が難かしいので、なるべく安全に、然も確實に着艦出来る様にと工夫されてゐる。



機〇二一機載搭節三三力速 噸〇〇〇、三三水排(國米)がトラサ

次に世界にどれだけ航空母艦があるか。

ソ	獨	伊	佛	米	英
國	國	國	國	國	國
一	一	一	一	四	六
隻	隻	隻	隻	隻	隻
七、六〇〇噸				一〇〇、四〇〇噸	一四五、三五〇噸

(昭和十三年四月一日現在)

さて現在世界各國の海軍は、航空母艦でなくとも軍用機を積んでゐる。

昭和十三年四月一日現在の列強の海軍勢力は次の如

くである(但し既成艦中には艦齡超過のものも含む、ソ國の分に關しては不詳の點あり)

英國海軍 總噸數一、二五五、一六三

主力艦一五隻、航空母艦六隻、甲級巡洋艦一五隻、乙級巡洋艦四四隻、驅逐艦一六〇隻、
潜水艦五二隻 合計二九二隻

米國海軍 總噸數一、一六八、〇四五

主力艦一五隻、航空母艦四隻、甲級巡洋艦一七隻、乙級巡洋艦一三隻、驅逐艦二一五隻、
潜水艦八七隻 合計三五一隻

佛國海軍 總噸數五〇八、七四三

主力艦六隻、航空母艦一隻、甲級巡洋艦七隻、乙級巡洋艦一二隻、驅逐艦七一隻、潜水艦
七六隻 合計一七三隻

伊國海軍 總噸數四三五、八九四

主力艦四隻、甲級巡洋艦九隻、乙級巡洋艦一九隻、驅逐艦一一〇隻、潜水艦六六隻 合計
二〇八隻

獨國海軍 總噸數一三二一、〇三五

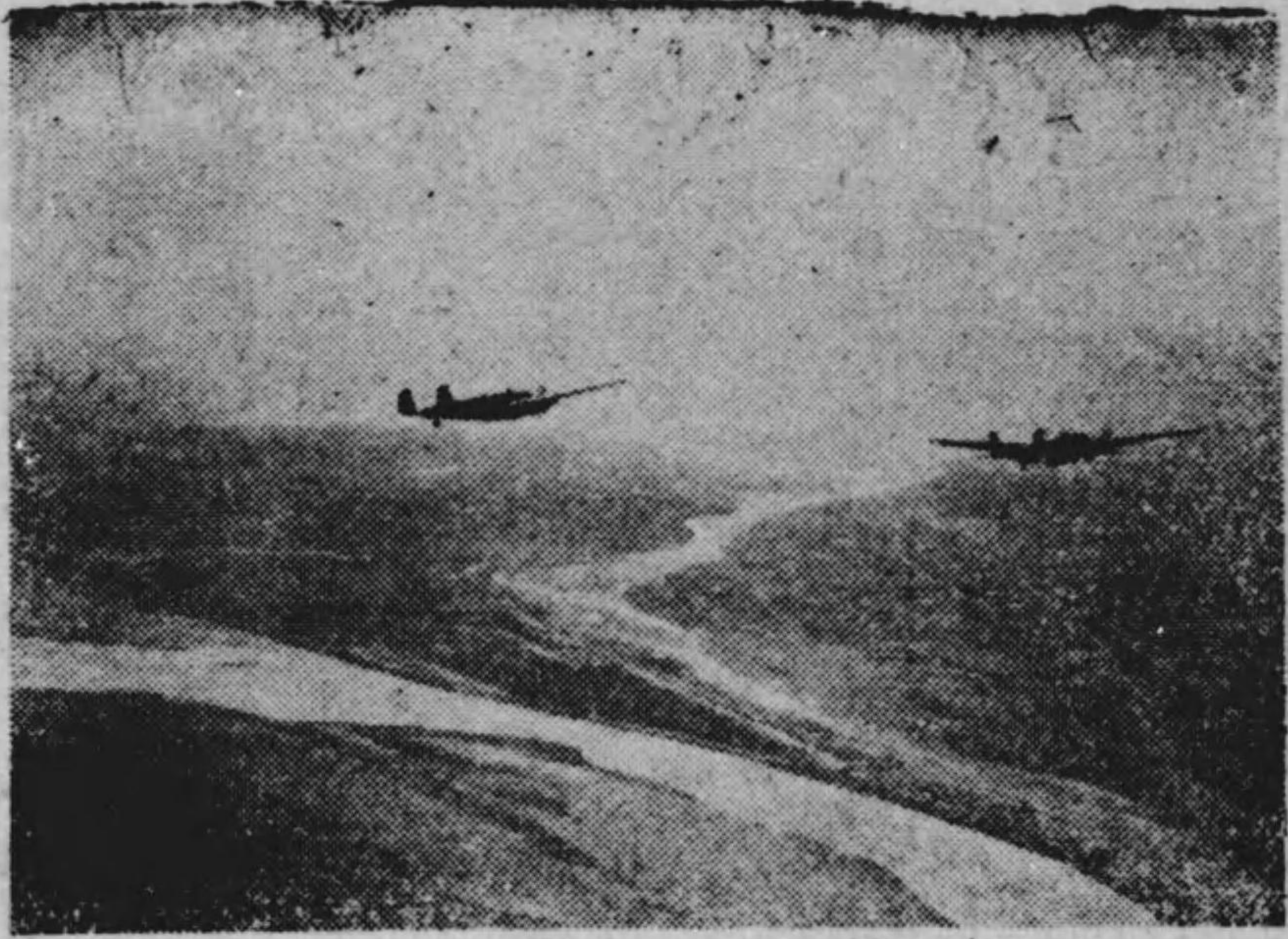
主力艦五隻、乙級巡洋艦六隻(甲級〇) 驅逐艦
七隻、潜水艦三六隻 合計六四隻

ソ國海軍 總噸數二四二、一五九

主力艦三隻、航空母艦一隻、甲級巡洋艦二隻、
乙級巡洋艦六隻、驅逐艦二五隻、潜水艦一五七
隻 合計一九四隻

敵陣爆撃の途に

以上の如くであるが、飛行甲板を持たぬものは、「デッキ」
「リック」といつて起重機の様なもので水上機を海面か
らつり揚げたり、つり下げたりして發着させる、水上
機母艦はワシントン條約やロンドン條約に依つて、例
へばアメリカではアメリカの巡洋艦の持ち分、即ち三
十二萬三千四百噸の巡洋艦の噸數の内四分の一の八萬



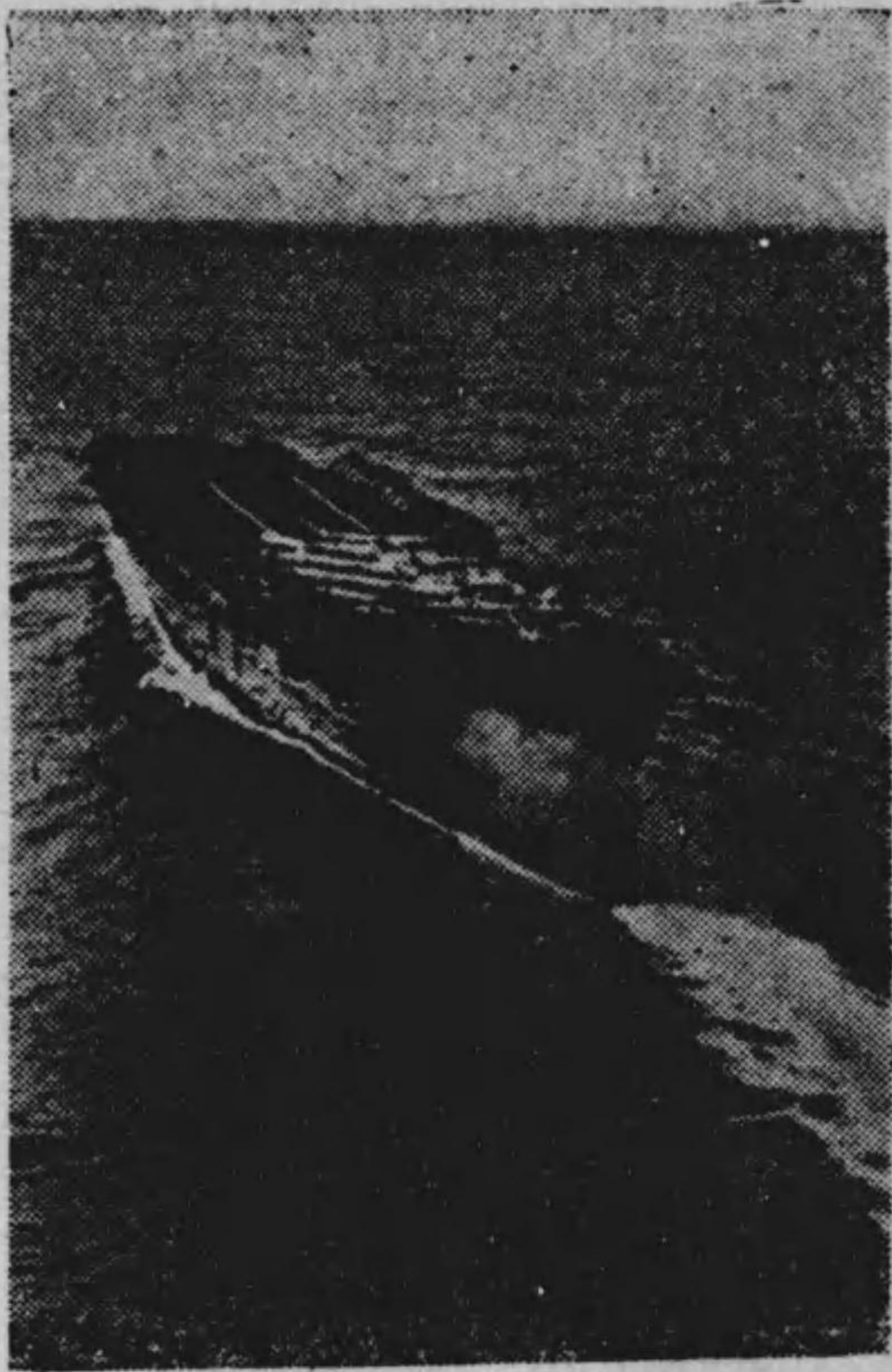
噸餘は、名は巡洋艦といつても、飛行機の發着出来る飛行甲板を持つた航空母艦と同じ様なものを、造つてもいゝ事になつてゐるので、アメリカの海軍ではこの建前に従つて一萬噸級の巡洋艦兼航空母艦を建造したいと願つてゐる。

これがよく航空巡洋艦といふものである。

従つてこの一萬噸數のが新たに建造されるとすると、三十何臺の飛行機は、充分積む事が出来るが一方その代りに、大砲の二門や、三門は減らされる事になる、だがその威力は驚歎するに足るものとなるのである。

X

航空母艦から飛行機をとり去つた、航空母艦身體の威力といふものは、攻る力も、守る力も、戦闘艦等に比べては、さして強力なものではない、兎も角も敵の航空母艦が、こつそりとうまく我が近海に攻めて來たとすると、その空中戦の恐ろしさは大したものといふはねばならない。従つて第一敵が攻めて來る様な事があつても、遠い遠い洋上で、こうした敵の航空母艦を撃沈させてしまへば、空襲を受ける心配も無くなる譯である。



カレンヂアス(英國)排水二二、五〇〇噸 速力三一節

機二四機載搭

何れにしても、敵の海軍全體を我が近海に究せ付けない様な、強力確かな海軍力を、我國に備へてゐなければ近ごろよく言ふ「國土防空」といふ事は保證されない譯である。

つまり陸上の方も理屈は同じだが、海上に於ても平常から強力な海軍を備へて、我が海上の威力を振ひ、海上の

安全を保つてゐなければ、國土も安全を期し難い事になる譯である。即ち海防が、防空の基になる譯である、これは大陸に對しても同じで、例へば滿洲などに我が陸軍の強い力が振はれてゐれば、そこをつきぬけて帝都の空を脅かしに來る、敵の飛行機は一寸ないでせう。

それと同じ理窟で海洋方面で、何をおいても強力無比な海軍艦隊と、勇猛果敢、精銳を誇る海

軍機が厳然としてゐるならば、海上も帝都も安全であるといへる。

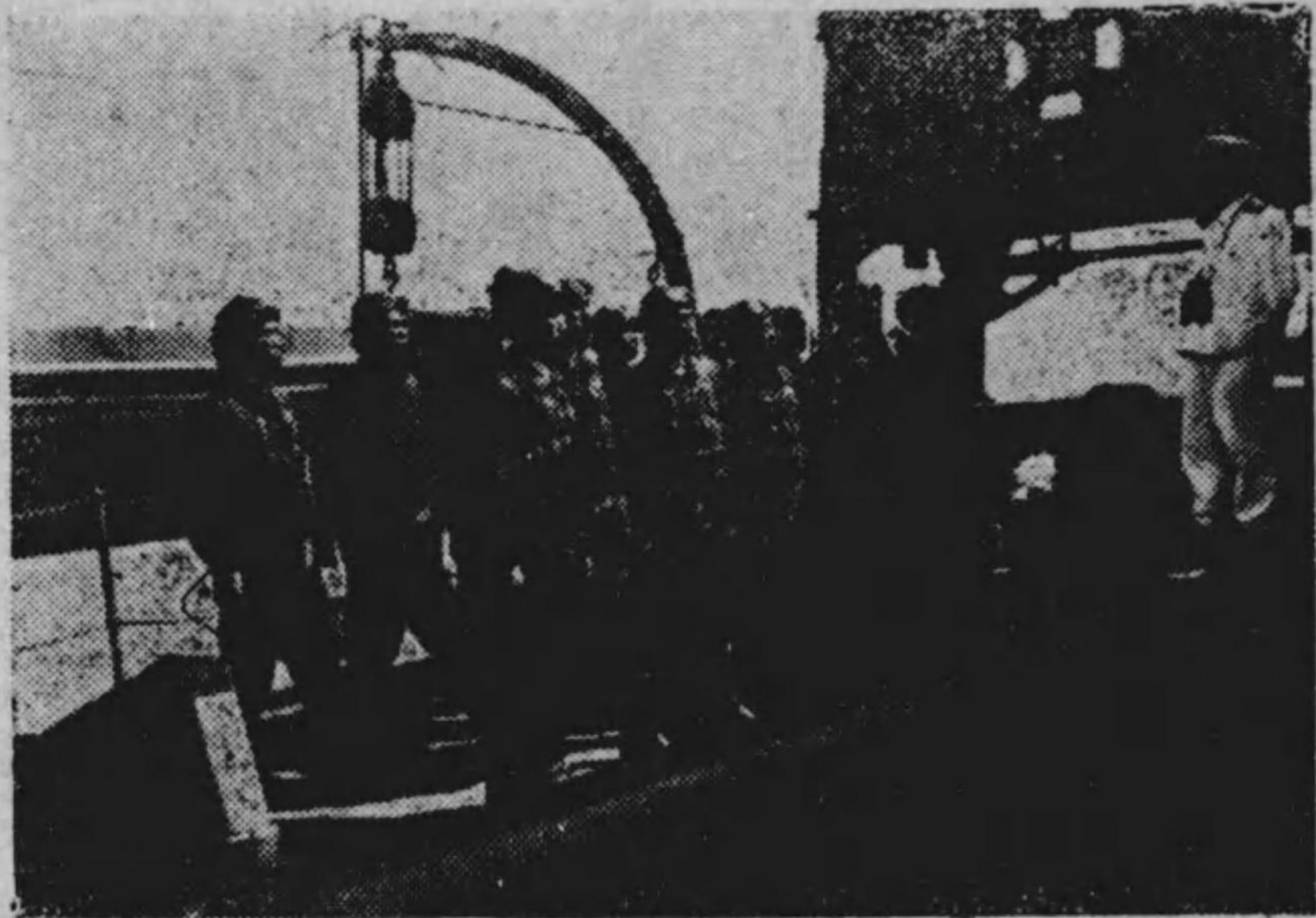
最後に我が國の航空母艦は赤城、加賀、鳳凰、龍驤、蒼龍、飛龍の六隻と、特務艦を改造した能登呂、神威、千歳及び建造中の「千代田」の水上機母艦が四隻がある。

空中戦と空爆の話

輝く我が海の荒鷲の武勳

科學の粹を集めた航空機の異状發達と、操縦術の非常な進歩によつて、空中戦は華かなものであり、物凄いものであるとは想像されてゐたが、今事に變に於ける海の荒鷲の活躍は、世界空中戦史を飾る壯烈無比、空前絶後のものである。

我が海軍機が實戦に参加したのは青島戦からである。



發出前訓示を受けたる荒鷲

大正二年特務艦「若宮」を改造して水上機母艦として、海軍小演習に参加させ、同年の觀艦式には初めて二機の飛行機が参加した。

翌三年の青島戦には、前記「若宮」を先頭に數臺の海軍機が活躍し、爆彈投下によつて例の有名なイルチス砲臺を沈黙させ、或は偵察或は着彈の觀則等を輝く手柄をたてた。

その後の躍進は「發達史」に於いて述べた如く世界列強に比して遜色ないまで躍進を遂げ、昭和七、八年の上海事變では、目ざましい活躍をして蘇州上空では米國人シヨートの操縦する敵機と空中戦を演じ美事之を撃墜させた。

今回の支那事變が勃發すると「海の荒鷲」の活

躍は世界空中戦史を飾る幾多の話題を投げた。

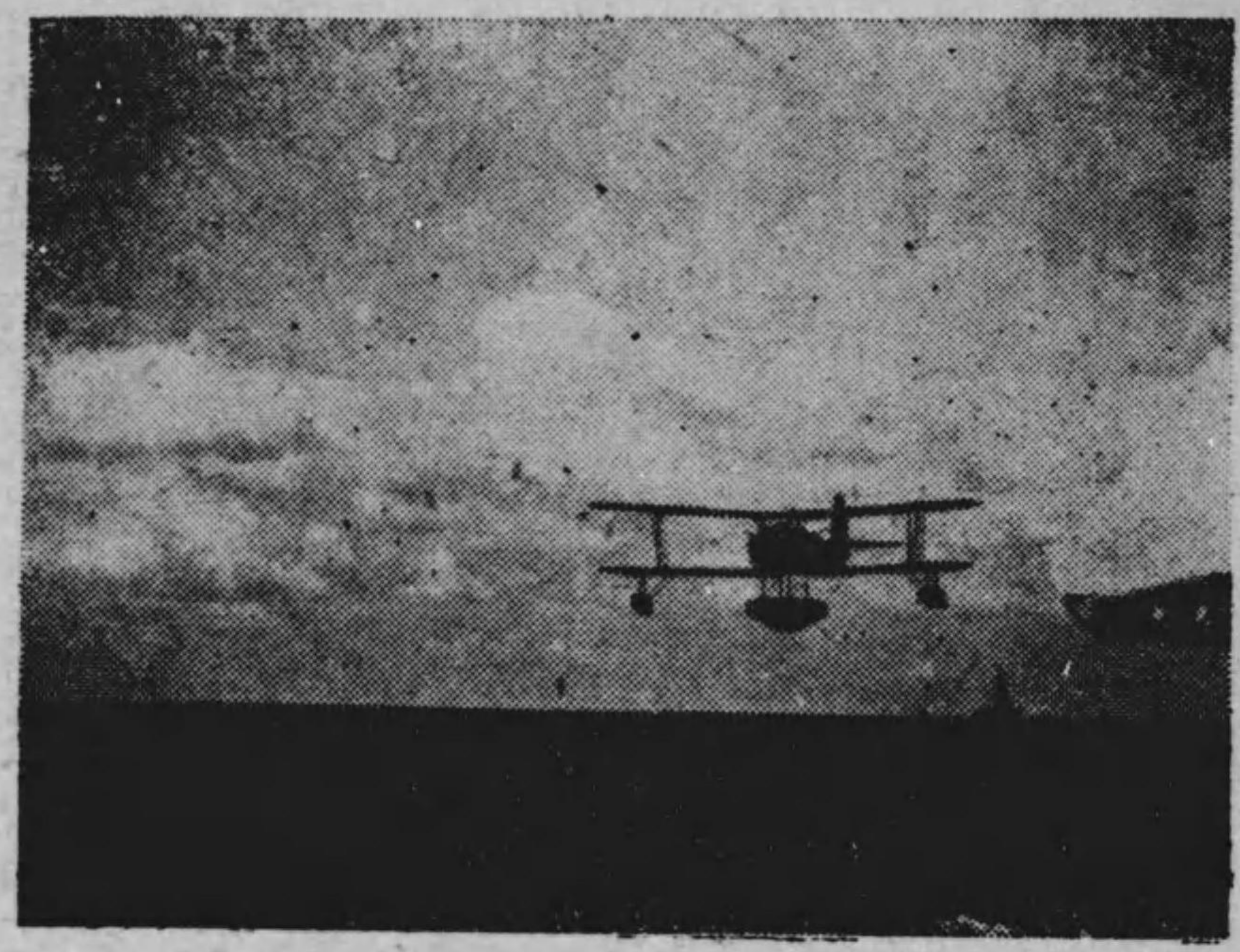
大暴風雨をついて長翔、敵飛行場及根據地を空襲する渡洋爆撃隊、浮舟をもつて敵機に體當り機上別れの白ハンカチ梅林機、體當り片翼よく〇〇杆櫻村機、片發の大串機、片翼南機等々、皇軍軍捷の跡に、武勳の数々は今「海の荒鷲」の上に燦として輝いてゐる。

航空機の異常發達によつて、華々しいものだとは想像してゐた空中戦、それが今事變で行はれた南京、漢口、武昌等抗日根據地の上空で行はれたのを見て、か程まで物凄いものだと、誰れが想像し得たらう。

歐洲大戦によつて航空機の活躍を知つた人々も、たゞ驚嘆するのみである。今回の事變について華々しい空中戦史の二、三を拾つてみる。

△浮舟で肉弾空中戦

我が〇〇航空部隊水上〇〇機は昭和十二年八月二十一日午前、上海上空を警戒中敵の戦闘機六機と會し忽ち敵二機を撃墜した。



機察偵上水くつに務任

續いて又敵爆撃機六機を發見忽ち二機を撃墜敵四機は戰意を失ひ敵一機は黒煙を吐きつゝ遁走した、此れを追撃中の我が矢野機（矢野一等航空兵曹、親美野三等航空兵曹搭乗）は、敵戰鬥機四機の奇襲を受け方向舵に損傷を受けた一機を撃墜、更に奮戦中、面倒とばかりに猛然浮舟をもつて體當り、敵機のプロペラを粉碎しその機を撃墜した。

△片翼よく〇〇杆

その物凄い勢に敵は驚いて逃走した、矢野機も操縦不能となつて、黄浦江上に不時着したが幸ひ我が軍艦に無事救助された。

少年航空兵出身櫻村三等兵曹は、昭和十二年十二月九日の南昌大空襲に参加した。むらがり襲ふ敵機の中に縦横無盡、そのうち反撃して来た一機面倒なりと、決死の體當りをくわせた所、敵機は黒煙をはいて墜落したが、無惨同機も左翼三分の一以上をへし折つた。安定を失ひ右に、左に傾く愛機の操縦桿を握りつゝ、〇〇基地まで〇〇杆苦難の長翔。あゝ神技でなくて何んであらう。

世界中戦史にも稀れにみる武勳であり、その機は今滋谷の海軍館に飾られ、見るものを一たゞ感激と賞讃の辭を久しうさせてゐる。(六十三頁寫眞参照)

△銃座・無言の凱旋

昭和十三年一月八日、軍艦〇〇航空部隊の二等航空兵曹平井宗二君は、分隊長大串秀雄大尉の操縦する爆撃機の、旋回機銃の銃座について南支〇〇飛行場爆撃に向つた。

高度八〇〇、まさに爆撃決行の一瞬、敵戦闘機四機現れ應戦、旋回銃の火蓋を切つた。

大串大尉は目的の爆撃投下で敵格納庫を粉碎したが、平井兵曹は應戦中胸部に敵弾命中し、血



敵軍飛行場爆撃

達磨となつて應戦したが遂に力盡きながらも「分隊長殿大丈夫です」

と悲痛な聲を絞つて、最後まで奮戦したが遂に旋回銃を握つたまま、護國の鬼と化して、基地に歸還し戦友を感激させた。

△壊すな陛下の飛行機

佐世保航空隊長谷川龜市二等航空兵曹、渡部綱雄三等航空兵曹は、一月八、九、十の三日間に行はれた、南寧、柳州飛行場空襲に敵機二機を撃墜、十二日に〇瓊州師團司令部爆撃の第二番機に加はつた、急降下爆撃で建築物一棟を完全爆破、悠々引揚げんとした刹那、渡部三空曹は左大腿部に貫通銃創を受け、大腿部

複雑骨折の重傷を負った。

その時自爆を思ひたつたが、陛下の飛行機を毀しては申譯ないと、悲壯な操縦を続けること数時間、無事に基地に歸還して着水したが、戦友が駆付けた時には、渡部三空曹は已に人事不省に陥つてゐたのであつた。

人事不省の着水、忠誠、天に通じての奇蹟であり、その心情は賞讃されてゐる。

△捨身の宙返りに敵機正面衝突

昭和十三年二月十八日、海の荒鷲の漢口空襲は敵機四十機と渡り合ひ、忽ち三十餘機を撃墜した歴史的大空中戦が行はれた。

そのうち小林航空兵曹は、ソ聯製SV型爆撃機を發見これに挑戦して、美事に撃墜し、森航空兵曹は敵戦闘機E十五號二機に、挟み撃ちされたので、捨身の宙返りを行つた所、敵機は瞬間に正面衝突をして、我が方は一弾も費さず敵を墜した。

更に相會三空曹は敵機數機を墜したが戦闘中に、右臀部に右胸部とに、貫通銃創を受けながら

も悠々〇〇基地まで歸還し、着陸信號を發して鮮やかな旋回後着陸した。

着陸後同氏が降りて來ないので戦友が駆けつけると出血多量の爲め人事不省に陥入つてゐた。

科學餘話

飛行機とピアノと牛

飛行機の恩人は牛、妹はピアノ

飛行機はピアノと親戚である。

飛行機といふのであるから、竹細工に紙を貼つた模型飛行機や、どこにもある玩具ではなく、あの大空を自由にかけめぐる眞物の飛行機なのである。

それがお部屋の隅に黒塗りの姿をドツシリと構えて輕妙な音律に、人を酔はせるピアノと親戚なのだから奇妙といへば、奇妙ではないか？ 或はもつと近い兄妹だとも言へるのであるから驚く外はない、なにしろ飛行機とは——現在の科學の粹を集め、一と度戦争ともなれば、唯一の武

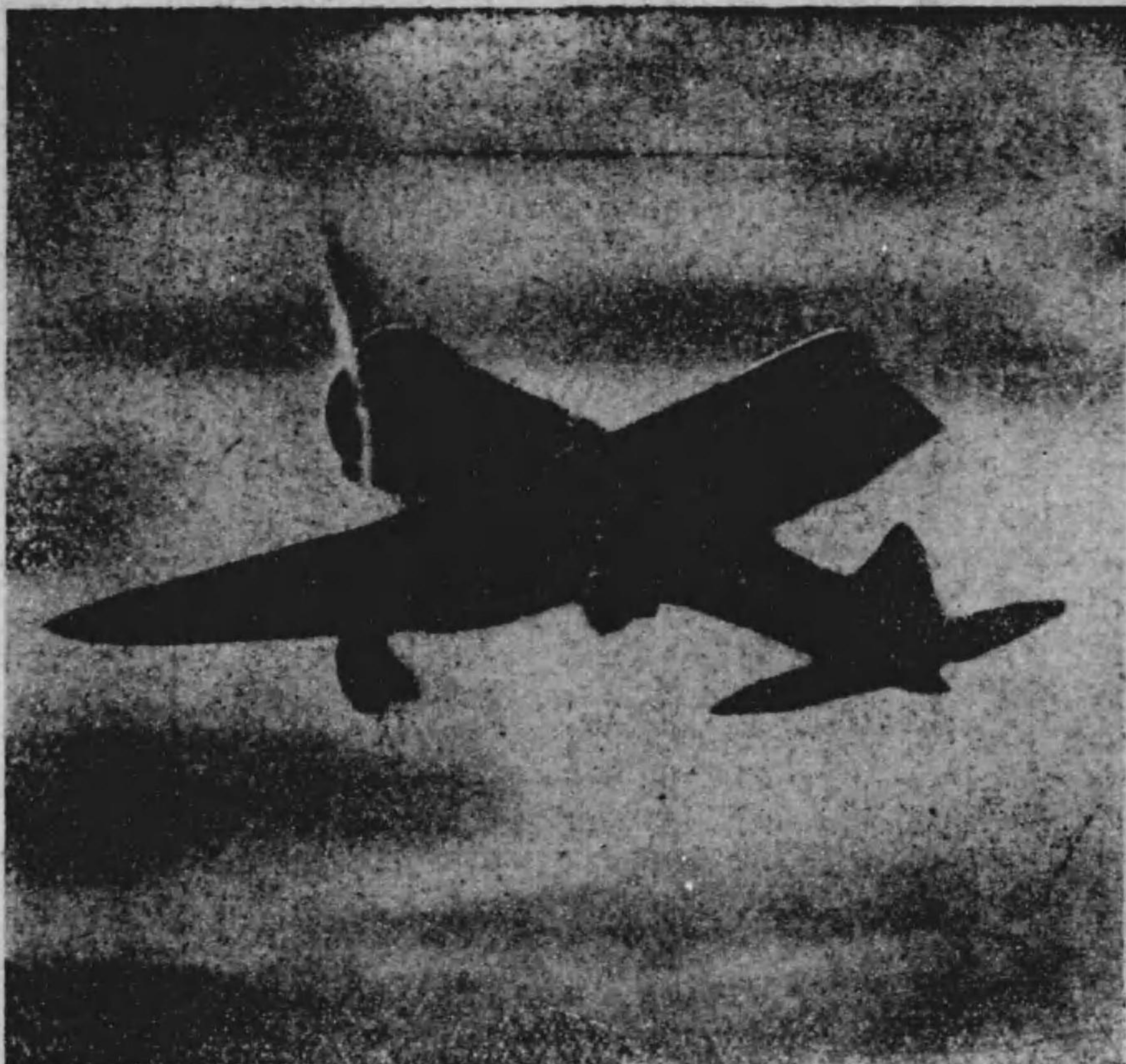
器である、一方ピアノは人の魂を酔はすとは言へ、戦争や、空とはまるつきり關係のないシロモノである、性能も、形もまるで違ふ、この二つを捕へて親戚だの、兄妹だのと言つても信じられないのは無理のない語である。そこで飛行機で君が代の演奏も出来るなどといつたら、ます／＼正氣の沙汰ではないと言ふかもしれない、諸君はピアノのキイをたゞいたことがありますが。でなければ、演奏會なり、ラヂオなり、蓄音機なりで知つてゐることと思ふ。あの美しい音は、針金をたゞいで出るものだ位は既に御存知でせう。そのピアノはたゞ針金を張つて、黒塗りの中に入れたものでは、あんな美しい音は出ないものである。



まづピアノから説明の必要がある。ピアノに使ふ木は柾樹といふ木である。

この柾樹の性質のいゝものを、永い間かゝつて選定し、薄板にするのである、この薄板にしたものを、幾日も日光にさらして、乾燥させクセを直す、そして立派になつた二、三分位の薄板は、カゼインで密着するのである。

カゼインといふのは、ニカワの十倍も粘着力の強いものである、爲めに張り付けるのは却々



機村徑翼片、あ

難かしい事で、下手にやれば二枚か、三枚が付いて、あとがはがれたり、又七、八枚がはがれたりすることがある。

三分位の板を一、二寸位の板に仕上げ一枚の板の様にするのであるから、素人には出来ないわざである。

こうして苦心を重ねた板をもつて、愈々ピアノの外側が組立てられて行く、外型が出来ると今度はピアノ線が張られるのである、此れは専門の技師がゐて、音は絶対

正確の様に細密な検査、研究が行はれる。そして一切がまとまると、あの黒塗りである。一體この黒塗りの表面ばかりの装飾ではなく、貼りつけた板がハゲない様にするのと、音色をよくする爲である。

この様に専門技術家、職工、音學家等が苦心を重ねて、一臺のピアノが完成されるのである。



處が不思議にも、飛行機がピアノと製法、用材が同じなのである。そこで僕はこの二つが親戚だ、兄弟だと云ひたいのである。アンリヨオ、アプロ等の初期時代つまり通稱チヨンマゲ機等の飛行機に、上翼と下翼との間に、いくつもの針金線のあるのを見た事があると思ひます、あれはピアノ線といつて、ピアノに使ふ針金なのである。そればかりか大型旅客機の翼、車輪のカバー等に支柱を使つてある、今は餘り多くはないがプロペラで木製なのは全部この支柱を使つてゐる。これもピアノと同様薄板をよく乾燥させ、カゼインで張りつけて出来たものである。

だから一本の支柱で、一つは飛行機に、一つはピアノに使はれてゐる様な場合は少なくない。更にピアノも前に云つた様に相當苦心して造るのであるが、飛行機は一層苦心がある。何しろ



陸軍の試験施設爆撃機

ピアノなら演奏会で少々ぐらい音が變でも相手は素人であるからゴマ化せるが、飛行機はそうはいかない、少しでも狂つた處があれば、すぐにも落ちて命をなくしてしまふから、事である、まづ、この點から云へば飛行機は兄で、ピアノは妹、これで飛行機とピアノが親戚だと云ふ譯が判つたことと思ふ。



そこで今度は飛行機で君が代の演奏である。今は餘り見られないが、チヨンマゲ機モス型四號、あれはまたピアノ線が非常に多かつた。今のアンリヨ、アプロ機も相當ピアノ線がある。

これ等の飛行機は飛んでゐる時はスバラシイ音を出す、一體がピアノ線であるから風に當れば好い音が出る譯である、そこに目をつけたのが彼氏である、彼氏とは當時陸軍の航空將校、後にT飛行場長、航空官となり、今はN航空輸送會社のO支所長のI氏である、氏は音學

の心得があつたとみへ、或朝ピアノ線の鳴りのいゝモス四型を飛行場に引出して、美事に飛上つた。

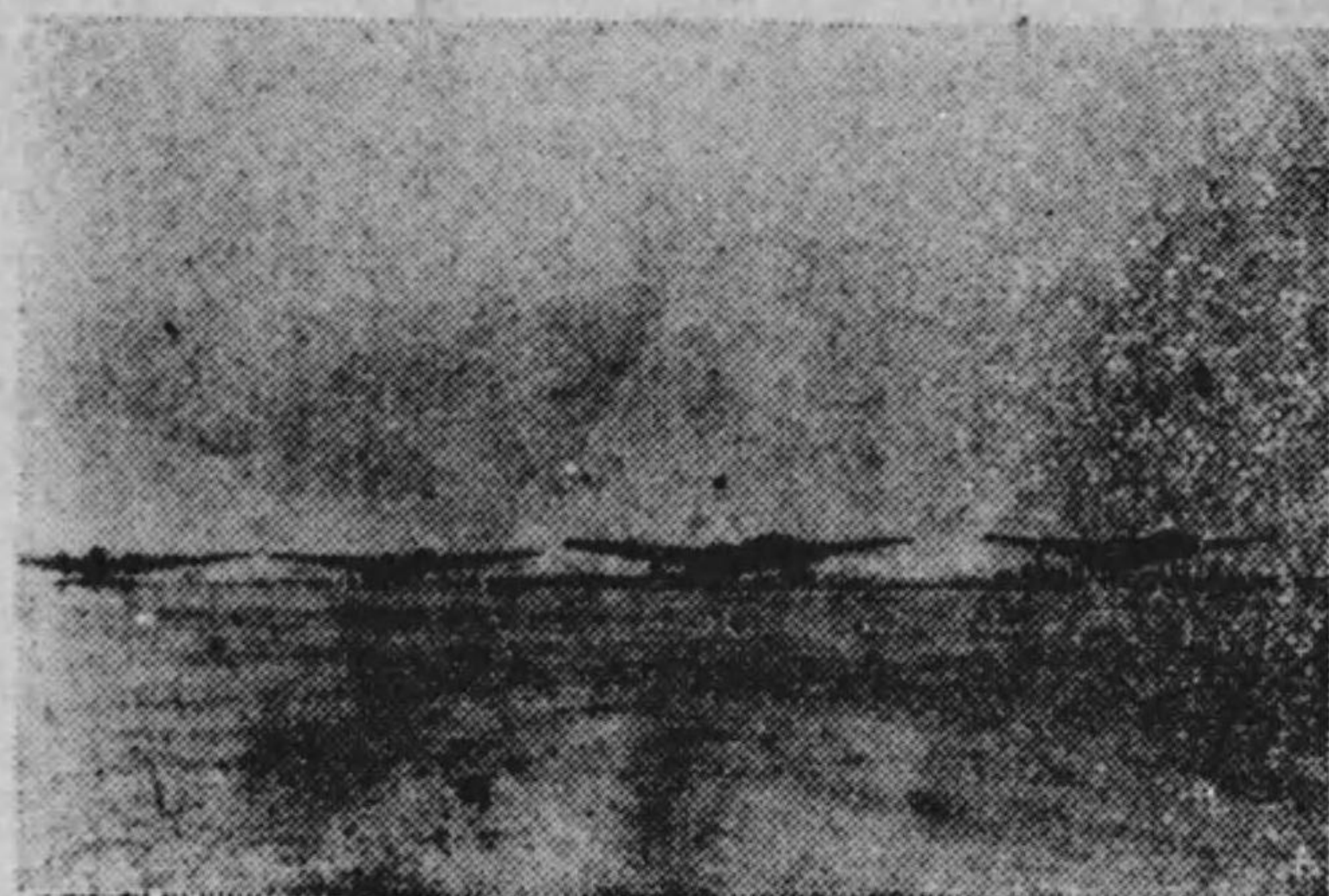
上昇——上昇もう此の邊でよからうと、エンジンを止めて演奏に取りかゝつたのである。エンジンを止めた瞬間、そのまゝ平行に十メートル、この時ピアノ線は「キー」と鳴る、續いて突込む五メートルが「ミー」。ちよつとエアポケットを受けた様に上下して直下二十メートル。ガアヨオーハー。上昇の心持で「チー」。

かくて「八千代」といふ處まで来た時、ハアツ!!と気がつけば陸上僅かに三十メートル。驚いてそのまゝ着陸してしまつたのであるが彼氏はこの演奏は少なくとも千メートルの上空からでなければ駄目だと気がついたのである、然し残念ながら當時のモス四型では、千メートルの上昇は不可能だつたのである。

この爲彼氏の折角の名案も中途で失敗してしまつた、その後彼氏はこの名案を誰にも話さなかつたので、その跡をついで演奏したといふ人もなかつた様である。

X

次は飛行機の恩人は牛である。といふ、これも不可思議な話である。



勢揃ひの海軍飛行機

何しろ動物のうちでは鈍重そのものゝ様な牛と、スピードでは科學のうちで、之に比ぶべきものがない飛行機と、その對照は餘りに違ひ過ぎる、前のピアノと飛行機の場合より更に甚だしいかも知れない、その牛をつかまへて「航空機の恩人だ」と稱するのであるから、相當な心臓であると言へば言へるのである。

然しこれも眞に、その理窟をさぐつてみると成程とウナブける點があるのである。

X

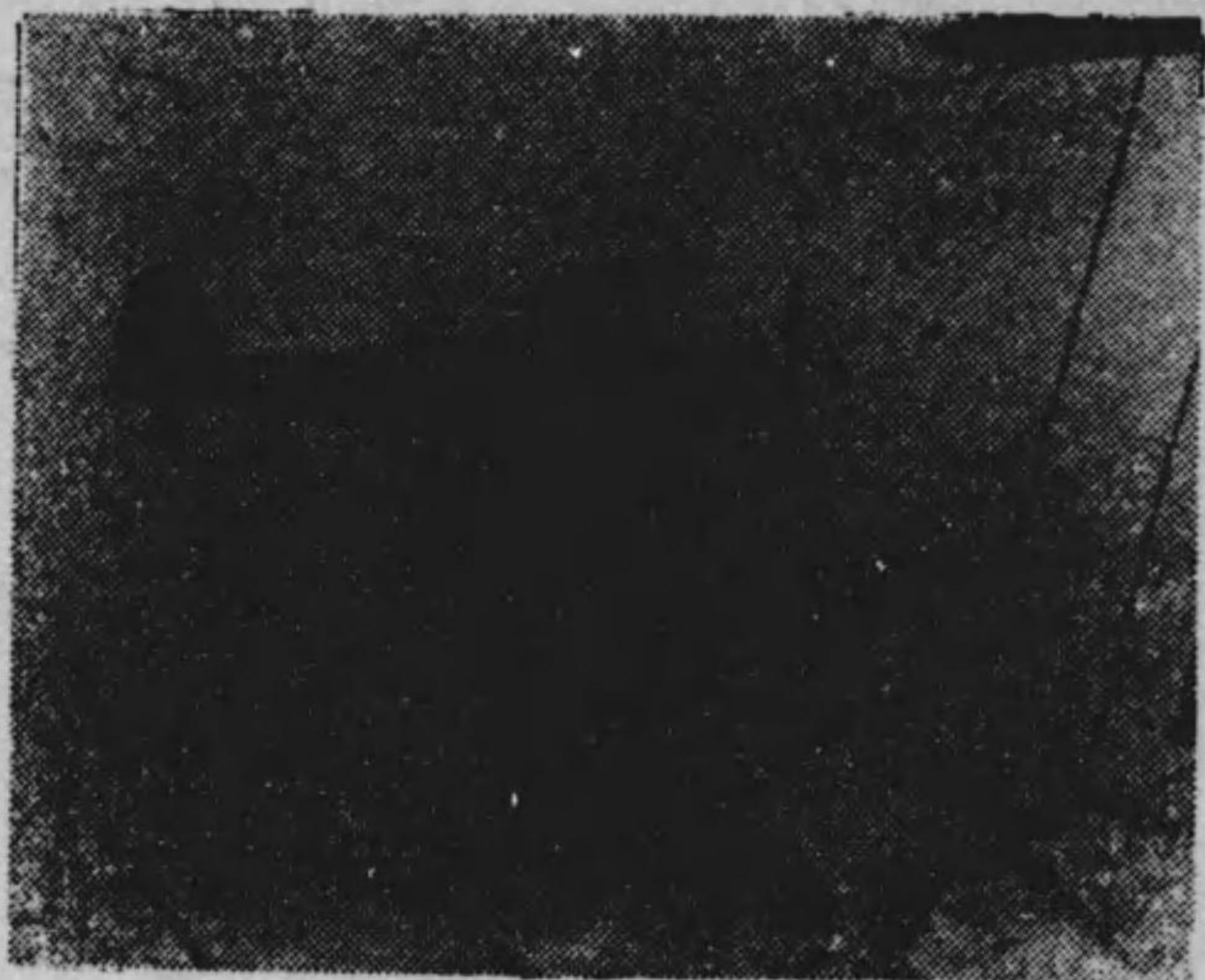
さて、ではどう言ふ譯で航空機の恩人は牛であると断定出来るか。

まづ牛の乳からはカゼインがとれる。
 前述のピアノとの関係の際に述べた如く、カゼインは木製飛行機になくはならぬものである。
 更に種々の塗料に、或は防水用として、その用途は非常に多い。
 次に外毛である。これは短い事と、非常に弾力性に富んでゐる爲めに座席のシートの中に入れられる。

つまりパンヤの變りに使はれるのだが、軽くて具合がよく、旅客機等はよく利用されてゐる。
 續いて外皮である。ボックスといふ皮がそれである、爲めにこの用途範圍も非常に廣い。
 まづ飛行帽になる、手袋になる、飛行服になる、皮のゲートル、靴等々、およそ皮製品として利用されるものは全部である。

最もこうした皮類は、航空機用品に限られた事はないが。更に旅客機の座席のバンド、バラシユートのバンド等は、凡てこの皮のナメシたものである。
 さて外皮、外毛、乳等の用途の説明が終つたが、残つた骨、角、爪、胃袋、腸、血液等であるまづその骨、角、爪である。

これは日本のニカワの最上品に精製されるのである。
 ニカワも木製飛行機にとつては、極めて重要な役割を演ずるのである。



爆 弾 投 下

カゼインと同様、プロペラをはりつけ、旅客機の翼車輪のカヴァー等柁樹を密着させ、或は防水、その他に用ひられるのである。

胃袋、腸、あれはソーセイジや、氷嚢にばかり利用されるのではなく、あの中にガスをつめ込んで飛行船のガス納庫につめられる。

従つて言ひかへれば、牛幾匹かの犠牲が、大空の巨鯨、飛行船を飛ばしてゐる事になる。

最後は血液である。
 その血液は赤の塗料である。

かくて牛の凡ては航空機に必要なものばかりである。

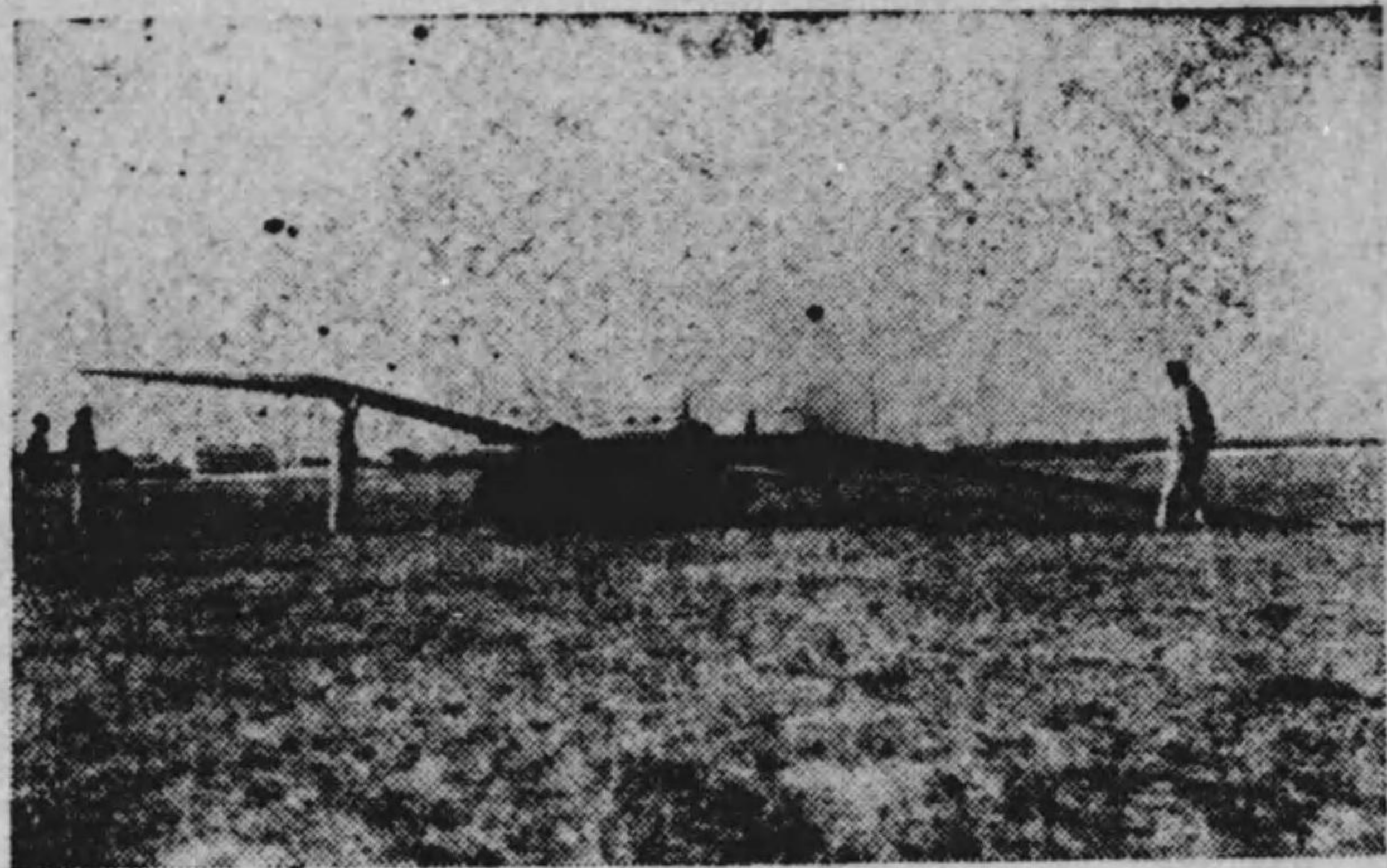
最も最後に残つた肉は、人間の食料として用ふるから全く無駄がない。

×
かくの如くでライト兄弟の銅像を建てるならば、その脇には牛の銅像をも建てなければならぬといふ下手な理窟が成立つ譯である。

グライダーの話

藪の様に悠々と飛んでゐるグライダー、それは確にスポーツとしては最高級のものであると云へやうグライダーは空のヨットとも云ふべく飛行機とは汽船以上の關係があり、欧米では益々發達してゐるので我が國でも遅れぬ様に發達進歩を圖らねばならない。

構造は不必要の重量を極端に減じてゐる點は輕飛行機の發達を提進させ、氣流を利用する點は既成飛行士に高等航空法を教えるものとして益々重要視されてゆき、ドイツのルフトハンザ輸送會社の如きは二年間のグライダー練習を行つたものでなければ旅客機の正操縦士にはなれないといふ程である。



— ラ ア ソ

×
然してグライダーの發達は本場のドイツでも歐洲大戰後の事であるから飛行機程一般に發達し、それに関する知識も普及されてゐないのは當然の事かも知れないが、ドイツに刺戟されて現在では全世界各國が競争的に研究してゐる。然も單に記録を作るばかりでなく空中戦に参加しようとしてゐる現在の世界記録は三十六時間餘距離三百七十軒である、日本記録は先年九州帝大の阿蘇五型が久住高原で（志鶴飛行士）が飛んだ一時間十八分餘である。

×
以上の如くでスポーツの最高級グライダーの知識普及を圖ることは急務と考ふるものである。

今日のグライダーは性能に於て三種ある。

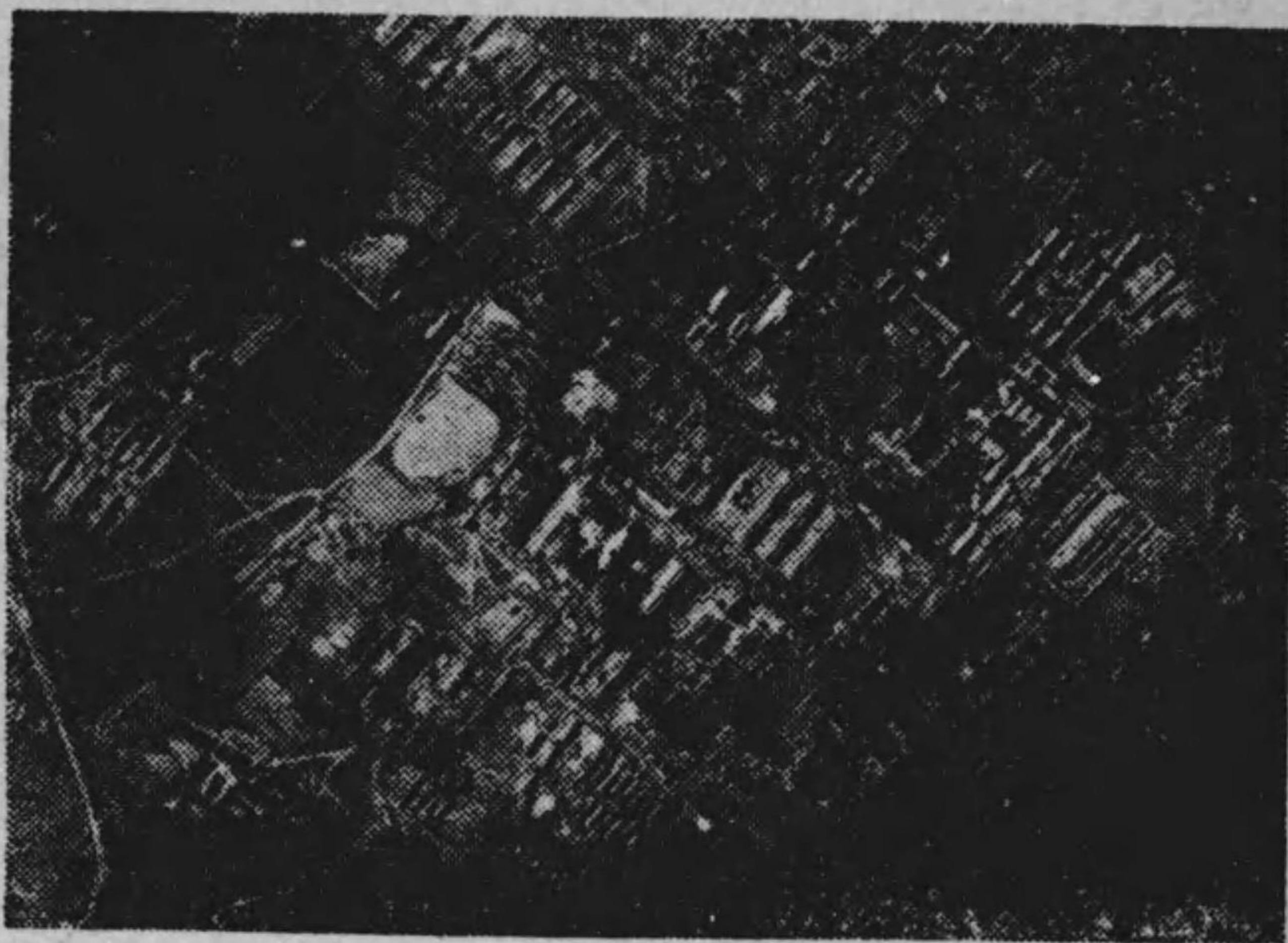
- 一、プライマリ（基本練習機でつまり初歩練習用である）
- 二、セコンダリ（高等練習機である）
- 三、ソアラ（帆走機）

プライマリは直線練習セコンダリは氣流に乗つて旋回する事を習ふもので共に高丘陵から低地に向けゴム紐に引張られて飛ぶものでソアラの練習用に過ぎない。

ソアラは上昇氣流や空氣の流動を利用して、最初の出発點より遙かに高い高度まで上昇するばかりでなく鷲の様に悠々と大空を飛び長時間の滞空にも可能である。そのためにソアラ又はセールプレーンと呼ばれ、日本語では帆走機或は滑翔機と譯されてゐる。

x

グライダーは簡単に云へば發動機のない飛行機であるが、主翼、胴體、尾翼、操縦、装置、降着装置等を備へてゐるから普通の飛行機から發動機をとつたものと何等變らない、然も空氣中に浮いてゐるのは主翼に生ずる揚力のため此の揚力は飛行機ではプロペラの回轉によつて機體が



敵軍用根據地猛襲

前進する爲めに生じるがグライダーはその重量によつて、空中が主翼に及ぼす反動に基因するのである、従つてグライダーは空中を滑り降りる事が一番重要な問題でこれはグライダーの重要主翼の面積等大いに關係があるのである。

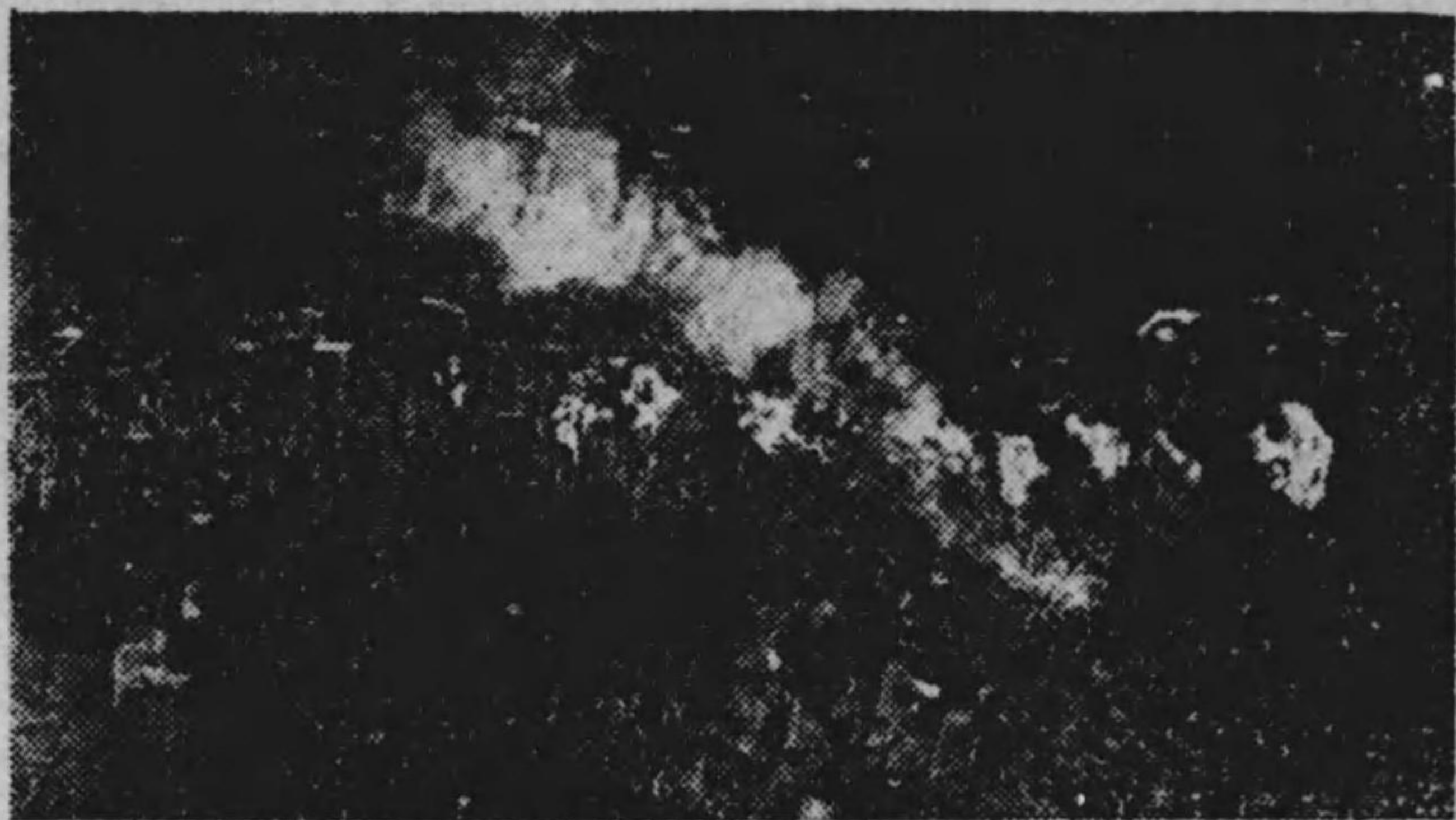
グライダーが空中を滑り降りる傾斜は（滑空角グライデング・アングル）は滑空の折グライダーが沈下する垂直距離と、それだけ沈下する間に前進する水平距離との比で一対一〇とか一対二〇の如くに云ひ表はされてゐる、一対一〇とは例へば一メートル沈下するに十メートル水平に前進するもので角度にすれば六度弱に相當する傾斜である）

だから滑空角が少なければそれだけ同一の高度の損失に對して遠距離に達する事が出来る譯だから、この角度はグライダーによつて非常な重大な性能上の要素といはねばならない。

◇プライマリ

最初の練習用のものだから簡単に修理も製作費も安い、操縦席は主翼前縁附近にあつて操縦士は氣流に當りながら操縦する様に出來てゐるので、滑空や滑空角等の飛行要領を會得するに適當してゐる、製作は主として木材だが胴體には軟鋼管を用つたものもある、大體の性能は

- 自重 八十乃至九十疋
- 全重量 百五十乃至百六十疋（操縦者を七十疋と概算）
- 主翼面積 十五乃至十七平方米
- 翼荷量 十乃至十一疋
- 主翼全幅 十乃至十二米
- 滑空速度 四十疋
- 着陸速度 二十五キロ



根據地を空を飛

- 沈下速度 一秒一・二乃至一・五米
- 滑空角 一對八

◇セコンダリー

プライマリに比較するとソアリングする事が出来るから愉快だ、然して實際には性能の範圍も廣くソアラと何等區別も出来ないものが多い。

主翼、全幅、重量、翼荷重等は大體プライマリと同様だが機體全體がプライマリより遙かに空氣抵抗を減ずる様に設計されてゐる處が主要な相違點である、これが爲めに性能の上では沈下程度が小さく滑空角も小さくなつてゐる。

- 自重 八十乃至九十疋
- 全重量 百五十乃至百六十疋（操縦者を七十疋と

概算して)

主翼面積	十五乃至十七平方米
翼荷重	十乃至十一庇
主翼全幅	十乃至十二米
滑走速度	三十乃至五十軒
着陸速度	二十五軒
沈下速度	毎秒〇・五乃至一・〇米
滑空角	一對十二乃至十七

◇帆走機ソアラ

上昇氣流を利用したり或は種々に流動する空氣の持つエネルギーを利用して自由自在に滑翔する事の出来るのを主眼としてゐるものであるから、空氣力學上の研究に基いて極度に抵抗を減じ、揚力を増すやうに設計製作されるので主翼全幅とアスペクトレシオは大きく銅體は短いのを特長としてゐる。



水上偵察機壯途に向ふ

自重	百五十七庇
全重量	(操縦者を含む)二百二十八庇
主翼面積	十八平方米
翼荷重	十二・六庇
主翼全幅	十九米
アスペクトレシオ	二〇
沈下速度	毎秒〇・六米

海軍への献金について

海軍省経理局々員
海軍主計少佐

石 洸 知 定

赤誠あふるゝ國民が、我が海軍へよする献金については、たゞ感謝、感激の他はなく係官としてこの際厚くお禮を申上げる次第である、この献金のうち國防献金は、飛行機その他の兵器を作ることになつてゐるが、特に多額の私財を献金或は共同據出によつて航空機を献納、報國第×號××號と命名されてゐるものその數既に二百を越してゐる、然して今回の支那事變勃發以來海軍へ、海軍へと献金する國民の赤誠は、本年五月中旬一千九百萬圓の巨額に達し當局を感激させてゐる、これで航空機を作れば海の荒鷲の威力は幾倍加するか判らない、かくの如く、いざと言ふ時に國



石 洸 知 定 主 計 少 佐

結が出来る魂は 一君萬民 盡忠報國 わが國民の永劫不變、子々孫々にまで脈々として

通するところの皇道精神に他ならないのである。以て我が國が列國に誇り得る所である。我が海軍への献納機は、前述の如く報國第×號×號を追ひ、更に献納者の名前をとつて××號と命名される、例へば「三谷」といふ人から飛行機を造つてくれと多額の献金があつた場合にはこれは「報國第×號三谷號」と命名されるのである。

更にこの「三谷號」は永久に海軍に残される事になつてゐる、つまり献納機が破壊したとか、使へなくなつた場合等には、その飛行機はそれで終りとならず、海軍で今度は新しい同様の飛行機、報國第×號三谷號を作るのである。従つて海軍のある限り、永劫不變に献納機は存續される譯で、いつまでもその赤誠は残される事になる譯である。

然して我が海軍としては、金額の多少、品物の寡多を問ふのではなく、要は國民の美しい精神を載くのであるから、その精神を忘れず銃後の護りを固められんことを切望すると共に、海軍への献金、品の國民赤誠に謝する次第である。

尙海軍への献納機は次の通りである（今尙命名式を行はないものは含まない）

献金について

報國號飛行機一覽表

名	稱	職	者	機	圖	命名式年月日
第一號	エツケ	及日本毛織株式會社	日本毛織株式會社	偵察機	右	昭和七年三月三日
第二號	兵庫	兵庫縣	兵庫縣	偵察機	右	四月七日
第三號	第一吳鎮	吳鎮守府管下有志者	吳鎮守府管下有志者	偵察機	右	六月九日
第四號	第二吳鎮	吳鎮守府管下有志者	吳鎮守府管下有志者	偵察機	右	六月九日
第五號	石川	石川縣	石川縣	偵察機	右	六月九日
第六號	愛知	愛知縣	愛知縣	偵察機	右	六月九日
第七號	實業學生	全國實業學校職員生徒	全國實業學校職員生徒	偵察機	右	七月十日
第八號	鹿兒島	鹿兒島縣	鹿兒島縣	偵察機	右	九月五日
第九號	第三吳鎮	吳鎮守府管下有志者	吳鎮守府管下有志者	偵察機	右	十月二日
第十號	佐賀	佐賀縣	佐賀縣	偵察機	右	十月三日
第十一號	北澤	北澤	北澤	偵察機	右	二月三日

第十二號	橫須賀	橫須賀市	橫須賀市	偵察機	右	三月十日
第十三號	乃至第六三谷	東京市神田區	東京市神田區	偵察機	右	三月十日
第十九號	新潟	新潟縣	新潟縣	偵察機	右	昭和八年五月七日
第二十號	富國	富國縣	富國縣	偵察機	右	三月二日
第二十一號	埼玉	埼玉縣	埼玉縣	偵察機	右	三月二日
第二十二號	橫廠工友	橫須賀海軍工廠從業員	橫須賀海軍工廠從業員	偵察機	右	三月九日
第二十三號	第四吳鎮	吳鎮守府管下有志者	吳鎮守府管下有志者	偵察機	右	三月六日
第二十四號	第五吳鎮	吳鎮守府管下有志者	吳鎮守府管下有志者	偵察機	右	三月六日
第二十五號	佐賀	佐賀縣	佐賀縣	偵察機	右	七月五日
第二十六號	第一橫濱	橫濱市	橫濱市	偵察機	右	五月二日
第二十七號	日向	日向縣	日向縣	偵察機	右	四月三日
第二十八號	沖繩	沖繩縣	沖繩縣	偵察機	右	四月九日
第二十九號	中學生	全國中學校職員生徒	全國中學校職員生徒	偵察機	右	四月五日
第三十號	生保	生保株式會社	生保株式會社	偵察機	右	五月三日
第三十一號	佐世保	佐世保市	佐世保市	偵察機	右	六月四日
第三十二號	湘南	湘南地方住民	湘南地方住民	偵察機	右	五月四日
第三十三號	第一勞働	國防金勞働協會	國防金勞働協會	偵察機	右	五月三日
其他各地工場從業員有志者						

第三四號	某國有志者	偵察機	同右	同
第三五號(第一全國民號)	全縣有志者	同	同	同
第三六號(茨城)	茨城縣有志者	同	同	同
第三七號(海軍)	海軍部有志者	同	同	同
第三八號(川村)	東京市橋本區	同	同	同
第三九號(千葉)	千葉縣民	同	同	同
第四十號(第二橫濱號)	橫濱市市民	同	同	同
第四一號(川崎)	川崎市市民	同	同	同
第四三號(第一南洋號)	南洋羣島支那管內住民	同	同	同
第四五號(乃至第四七號)	臺灣製糖會社	同	同	同
第四八號(第二勞働號)	全國各地志者	同	同	同
第五十號(第二全國民號)	全國各地志者	同	同	同
第五一號(第四製糖號)	臺灣製糖會社	同	同	同
第五二號(第五製糖號)	臺灣製糖會社	同	同	同
第五三號(青森)	青森縣民	同	同	同
第五四號(神谷)	神谷市正治	同	同	同

第五五號(第一日本鋼管號)	日本鋼管株式會社	偵察機	同	同
第五六號(第二日本鋼管號)	北海道鐵道工場	偵察機	同	同
第五七號(北海道)	北海道鐵道工場	偵察機	同	同
第五八號(渡邊)	福岡縣教育會	偵察機	同	同
第五九號(福岡縣教員號)	福岡縣教育會	偵察機	同	同
第六十號(戶畑鑄物號)	戶畑鑄物株式會社	偵察機	同	同
六一號(明治生命號)	明治生命保險株式會社	偵察機	同	同
六二號(不動貯金號)	不動貯金銀行	偵察機	同	同
六三號(長崎市民號)	長崎市民	偵察機	同	同
六四號(大學高專號)	專門大學高等學生	偵察機	同	同
六五號(舞要號)	警備區內有志者	偵察機	同	同
六六號(第一倉敷網織號)	倉敷網織株式會社	偵察機	同	同
六七號(第二倉敷網織號)	倉敷網織株式會社	偵察機	同	同
六八號(愛知時計電機號)	愛知時計電機株式會社	偵察機	同	同
六九號(共同漁業號)	共同漁業株式會社	偵察機	同	同
七十號(第一セメント號)	日本ボートランドセメント聯合會	偵察機	同	同
七一號(第二セメント號)	加業會及セメント聯合會	偵察機	同	同
七十二號(福島)	福島縣民	偵察機	同	同
七十三號(文明)	朝鮮慶尙北道文明	偵察機	同	同

報國號飛行機一覽表

第七四號(第三全國國民號)	全國有志篤志者	戰鬥機	同	四月三日
第七五號(第四全國國民號)	南洋群島中、パラオ・ヤップ トラツク・ボナベ・ヤルフト 各支廳管下官民有志	同	右	同
第七六號(第二南洋號)	南洋興發株式會社	艦上攻撃機	(命名式不施行)	
第七七號(第一南洋興發號)	三越從業員	艦上輕爆機	同	六月六日
第七八號(第二南洋興發號)	東日本洋服商組合聯合會	艦上戰鬥機	同	九月七日
第七九號(第三南洋興發號)	青島方面在留邦人有志	水上偵察機	同	七月七日
第八〇號(第四南洋興發號)	大日本飛行少年團	艦上戰鬥機	同	九月七日
第八一號(三越號)	全國聯合小學校教員會	艦上輕爆機	同	十月三日
第八二號(東日本洋服號)	全國女子職業學校校長協會	艦上戰鬥機	同	昭和二年三月六日
第八三號(青島號)	全國女子專門學校校長協會	艦上戰鬥機	同	七月十九日
第八四號(第一兒童號)	全國高等女學校校長協會	水上偵察機	同	七月十九日
第八五號(教育號)	新潟縣西蒲原郡町村長會	艦上戰鬥機	同	昭和三年十月二日
第八六號(女學生號)	帝國在留軍人會	艦上戰鬥機	同	九月十七日
第八七號(西蒲原號)	西蒲原郡聯合分會	艦上戰鬥機	同	
第八八號(酒造組合號)	酒造組合中央會	艦上戰鬥機	同	
第八九號(西日本洋服號)	西日本洋服商組合聯合會	艦上戰鬥機	同	

第九一號 乃 至	東京 朝日新聞社	艦上戰鬥機	式未舉行	
(第一乃至第十全日本號)				
第一百號 乃 至	東京 朝日新聞社	艦上爆擊機	同	右
第十一乃至第十全日本號				
第一百一號(乃 至)	同	艦上爆擊機	同	右
第一百二十號(第二乃至第三)	同	艦上攻撃機	同	右
第一百二十號(第十全日本號)	同	艦上攻撃機	同	右
第一百廿一號(第一西日本號)	福岡 日日新聞社	艦上爆擊機	同	昭和三年二月七日
第一百廿二號(第二西日本號)	同	艦上爆擊機	同	昭和三年二月七日
第一百廿三號(第一太平洋號)	太平洋洋漁業株式會社	艦上攻撃機	同	十月三十日
第一百廿四號(第二太平洋號)	所屬 獨航船主一會	艦上攻撃機	同	十月三十日
第一百廿五號(第一住友號)	住友會社 本社員一會	艦上戰鬥機	同	十二月十五日
第一百廿六號(第二住友號)	住友會社 本社員一會	艦上戰鬥機	同	十二月十五日
第一百廿七號(住友續業號)	住友續業所外四社	艦上爆擊機	同	右
第一百廿八號(帝麻號)	帝國製麻株式會社	同	同	十月三十日
第一百廿九號(錦耐聯盟號)	全國新式錦耐聯盟會	艦上攻撃機	同	十一月二十八日
第一百三十號(第一東京市教育團號)	東京市教育團	同	同	十月三十日
第一百卅一號(大銀座號)	大銀座聯合町會	艦上爆擊機	同	同

報國號飛行機一覽表

報國號飛行機一覽表

第百卅二號 (レイト號)	レイト化粧料本館	艦上戦闘機	同	十一月二八日
第百卅三號 (第五全國民號)	全國民有志	艦上爆撃機	同	十月三十日
第百卅四號 (第二東京市教育團號)	東京市教育團	同	同	右
第百卅五號 (第一日本)	日本中央	艦上攻撃機	同	十一月二八日
第百卅六號 (第二日本)	朝鮮慶尙北道民有志	艦上戦闘機	同	十一月十三日
第百卅七號 (第一慶北號)	朝鮮慶尙北道民有志	艦上爆撃機	同	十一月十三日
第百卅八號 (第二慶北號)	愛國婦人會兵庫縣支部會員	水上偵察機	同	十一月十九日
第百卅九號 (愛婦兵庫支部)	大阪市東區大川町有本國造	艦上戦闘機	同	十一月十八日
第百四十號 (大阪有本號)	東京市京橋區八丁堀	同	同	十一月十八日
第百四一號 (第一村上號)	村上喜代次	同	同	十月三十日
第百四二號 (第二村上號)	臺灣全島小學校	艦上攻撃機	同	式未舉行
第百四三號 (臺灣學校號)	滋賀縣	水上偵察機	同	十一月三日
第百四四號 (滋賀號)	樺太島島民	艦上戦闘機	同	十一月二八日
第百四五號 (第一樺太號)	福岡縣產業組合	艦上爆撃機	同	十一月七日
第百四六號 (第二樺太號)				
第百四七號 (第一熊本號)				
第百四八號 (第二熊本號)				
第百四十九號 (福岡縣產業組合)				

第百五一號 (全北號)	朝鮮全羅北道	同	右	同	十一月十四日
第百五二號 (海軍協會)	海軍協會兵庫支部婦人部	水上偵察機	同	同	十一月十九日
第百五三號 (第一熊本號)	熊本縣	艦上爆撃機	同	同	十一月九日
第百五四號 (第二熊本號)	全國青學校職員生徒	艦上戦闘機	同	同	十二月五日
第百六二號 (全國青年學校)	全國女子專門學校 全國高等女學校 全國女子職業學校	艦上爆撃機	同	同	十二月五日
第百六三號 (第二女學生號)	朝鮮 黃海道 道民	艦上爆撃機	命名式未舉行		
第百六十四號 (黃海號)	アヲフヲ海出漁真珠貝採取	水上偵察機	同	同	十三年三月十七日
第百七十五號 (南洋真珠號)	大阪市東區北久太郎町	艦上爆撃機	命名式未舉行		
第百六十六號 (大阪岩田號)	岩田常商店社長岩田常右衛門	艦上攻撃機	同	同	右
第百六十七號 (荒木號)	大阪市住吉區晴明通岩田常	水上偵察機	同	同	右
第百六十八號 (釜石號)	釜石市施行記念軍用機報國機	水上偵察機	同	同	十三年三月十七日

報國號飛行機一覽表

第百六十九號	(第三十一號)	東京朝日新聞社	艦上戦闘機	命名式未舉行
第百八十三號	(第四十七號)	大阪朝日新聞社	艦上爆撃機	
第百八十四號	(上海號)	上海居留民有志	艦上戦闘機	同 右
第百八十五號	(青年團號)	大日本聯合青年團	同 右	十三年三月十七日
第百八十六號	(威北號)	愛國機成北號獻納期成會	艦上爆撃機	十三年三月十八日
第百八十七號	(第二中學生號)	全國中學校長協會	艦上戦闘機	十三年六月十八日
第百八十八號	(第三中學生號)	朝鮮威鏡南道道民	同 右	十三年三月十五日
第百八十九號	(威南號)	大阪西淀川區佃町	同 右	命名式未舉行
第百九十號	(溝口號)	溝口商車工場内 溝口良吉	水上偵察機	十三年二月二十日
第百九十一號	(第一愛媛號)	愛媛縣國防協會會長	艦上攻撃機	命名式未舉行
第百九十二號	(第二愛媛號)	知事 古川 静夫	艦上戦闘機	十三年六月十八日
第百九十三號	(至誠號)	全國刑務所收容者有志一同	艦上戦闘機	命名式未舉行
第百九十四號	(ダバオ號)	比島ダバオ日本人會	艦上戦闘機	命名式未舉行
第百九十五號	(北千島水産號)	北千島水産會會員	艦上戦闘機	命名式未舉行
第百九十六號	(第一全南號)	全羅南道軍事後援聯盟	艦上戦闘機	同 右
第百九十七號	(第二全南號)		艦上爆撃機	
第百九十八號	(第三全南號)			
第百九十九號	(全南棉花號)			
第二百號	(全南生業號)			

第百二十一號	(第七三谷號)	東京市麹町區五香町 三谷てい	艦上攻撃機	同 右
第百二十二號	(第一高雄號)	高雄州民一同	艦上攻撃機	十三年五月七日
第百二十三號	(第二高雄號)	代表知事 内海忠司	同 右	十三年五月九日
第百二十四號	(全臺灣號)	臺灣島民	同 右	十三年三月十七日
第百二十五號	(第二青年團號)	大日本聯合青年團	艦上爆撃機	命名式未舉行
第百二十六號	(黑川號)	大阪市天王寺區小宮町 黑川福三郎	艦上戦闘機	
第百二十七號	(第一朝鮮號)	社団法人朝鮮穀物協會	艦上戦闘機	右
第百二十八號	(第二朝鮮號)		艦上爆撃機	同

海の荒鷲 少年航空兵志願手續

紺碧に晴れた空青、仰ぐお空、そこにはいゝ知れぬ魅力がある、もしそこに焉でも飛んでゐたならば更に魅惑を感じ空を飛んでみたい、と感ずるであらう。大空を自由に翔けめぐりたい、とは人類の久しい切望であるのだ。然も最も困難な慾望は科學に

少年航空兵志願手續

よつて達せられたのであるから、空を飛ぶ——少年の夢は實現されたのである。だが大空へ志すものはたゞ空の魅力から、空を飛んでみたいからの單なる野望によるものでない事は論をまたない、お伽話に出て来る大空を翔ける夢にしては、餘りにも科學は發達してゐるのである、みよ今事變に於ける我が海軍航空隊、海の荒鷲の華々しい果敢なる武勳を。然もその荒鷲の勇士の中に少年航空兵の目覺ましい活躍には、國民も驚歎、感激と感謝と賞讃の拍手を送つたものである。

これ等の中にはあの事件發生當時、大暴風雨を冒して長驅、渡洋爆撃隊に加つて活躍敵弾數十發を受け尙片發動機を射抜かれたまゝ歸隊せる大串機、彈丸つき體當りをくはせ片翼となつてよく六百斤を歸翔せる樫村機、その他鬼神を泣かすが如き、これ盡忠報國の一念につきる勇士の手柄をみるとき「あゝ少年航空兵」「海の若鷲」を志すも亦當然の事と思はれる。その少年航空兵制度は我が國では海軍がまづ採用し、十五才以上十八才未満のものを次の制度で採用する事になつてゐるが、不明の點があれば町村役場、區役所の兵事課で聞けば判る様になつてゐる、我が海軍がなぜ志願兵の採用に重きを置かねばならぬか、それは種々の理由にもよるが

分り易くいへば

- 一、日本獨創の優れたる艦船兵器機械等の活躍は優れたる日本青年の手に依らねばならぬ。
- 二、最新知識を集めたる海軍を了解するには長期の服役を要すること。
- 三、優秀有爲の軍人の養成。
- 四、特務士官、准士官としての活躍期待。

海軍の活動の舞臺は洋々たる大洋である、そこに無敵海軍の存在こそ、平戦兩時に於けるわが帝國の繁榮と、防護に缺くべからざるものである、従つて思想堅實にして學力、體力共に優秀なる全國の青少年が、眼を帝國の前途に注ぎ奮つて身を海軍に投ずることは以つて海軍の爲めに意を強くするところである。

この少年航空兵を海軍では乙種飛行練習生と稱して横須賀海軍航空隊に入隊の上、特別教育が行はれる事になつてゐる。

少年航空兵の乗

少年航空兵の主なる役自は、航空機の操縦及び機上の諸作業である。

● 身體検査

視力	活量立糧	胸廓擴張(糧)	胸圍(糧)	體重(斤)	身長(糧)	各眼視力					
						十八年以上	十八年未滿	十七年未滿	十六年未滿	一五年未滿	
1.0	三、二〇〇	六・〇	八〇・〇	五一・〇	一五七・〇	三、〇〇〇	六・〇	七九・〇	四五・〇	一五三・〇	一五二・〇
	三、〇〇〇	六・〇	七九・〇	四八・〇	一五六・〇	二、八〇〇	六・〇	七七・〇	四三・〇	一五三・〇	一五二・〇
	二、八〇〇	六・〇	七七・〇	四五・〇	一五五・〇	二、七〇〇	五・五	七四・〇	四三・〇	一五三・〇	一五二・〇
	二、六〇〇	五・〇	七二・〇	四一・〇	一五一・〇						

乙種飛行豫科及偵察練習生志願者の視力は當分の間一・〇迄低下された。
(注意)

- (一) 近眼や強度の「トラホーム」腋臭等は合格覺束ないが「トラホーム」は輕いものは早目に治療すれば全治する筈である。
- (二) 識色の判別がつかないもの(色盲)は海軍兵には不適當であるから思ひ止まる外はない。
- (三) 胸廓擴張は深呼吸で胸の縮張する程度を検査するので、擴張時と縮少時との胸圍の差が多い程良い。
- (四) 活量は肺に一杯空気を吸ひ込んで之を吐き出す量を測るのであつて、其の量が多い程良い。
- (五) 身體懸垂は上から吊した綱を片手で握り、身體をぶらさげ、五秒間堪へられなければならぬ。

● 學術試験

學術試験は讀書、數學の二科目に就き高等小學校卒業程度によつて行はれる。その他適應検査が行はれる、試験成績の他に學校に於ける成績が加味されるから通信簿(學業證明書)青年學校手帖及び各種の褒賞状を有するものは、之を携帶して検査場で、徵募官の閱覽少年航空兵の乗

を受けなければならぬ事になつてゐる。

●志願者心得

- 一、決心 父兄や先輩によく相談して自分の年齢、學力、身體から考へて如何なる兵種に適するかを決め、若し希望の兵種が二つ以上あるならば第一志望何々、第二志望何々とすること
- 二、出願 市(區)町村役場に出頭して兵事係(課)に海軍兵志願の旨を申告してきめられた期日迄に願書を差出すこと。豫備検査や豫備教育を行はれる場合には進んで之に應ずること。
- 三、準備(イ)學科は高等小學卒業程度の數學と讀書を反覆勉強して置くこと。
(ロ)身體の鍛錬に心懸け又悪い所はないかよく前の規格表に照して見て置くこと。
出来得れば學校醫等の検査を受け軽い疾病はすぐ治して置くこと。
(ハ)品行を慎み精神の修養に努め、あらゆる誘惑に打ち克つこと。
(ニ)検査前日には必ず入浴して身體を清め且耳や鼻の内部をよく掃除して置くこと。
- 四、検査當日の携帶品(イ)青年學校手帳(青年訓練手帳) (ロ)尋常小學四年以上の通信簿全部(通信簿なきときは學業證明書)及各種褒賞等
(ハ)鉛筆、ナイフ、消ゴム (ニ)辨當及脱いだ衣服所持品等を包む風呂敷
- 五、検査開始時刻に必ず遅れぬこと。

●志願者の第二次検査

本検査は従來入隊の際行はれてゐたものであるが、一昨年より四月中、下旬に繰上げて行ふこと

とになつた。

即ち志願兵検査に乙種飛行豫科練習生志願の航空兵を志願し合格した者の中より選抜して約五日間各鎮守府所在の海軍航空隊に集めて更に學術試験(讀書、數學、雜問(地理、歴史、理科))適性検査及身體検査を行はれる。

右受検者に対しては海軍人事部より市(區)町村を経て本人に出頭通知と受検心得を送付せらる、此の検査の結果成績優秀なる者より採用者を詮衡せられるのであるが、検査が終了したならば採用、不採用に拘らず總て一旦郷里へ歸るのである。検査期間中は航空隊内に宿泊して兵食を給與せられ又出頭に用する往復旅費は官費で航空隊へ到着の上同隊で給與される。

●現役年数

海軍志願兵の現役期間は五年で、更に希望の者は満期前に出願すれば二年を一期として再現役を詮議の上許可される。下士官に進めば更に六年間現役を勤め、其の後同様に再現役を願ひ出ることが出来る。更に准士官、特務士官に進めば准士官は四十八歳、特務中少尉は五十歳迄、特務大尉は五十二歳迄、當分の間特務中尉は五十二歳迄、特務大尉は五十四歳迄(現役に務られる。

